

神浜アンノウンストーリーズ—Kamihama Unknown Storys—

TAICHI121

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神浜市立大学付属学校に通う中学生 真山 とうまと変人大学生 柴田 薫は魔法少女や魔女、ウワサなどの未知の存在とその裏に隠された謎に仲間と立ち向かう。

甲の章	たかが噂、されど噂	その1
たかが噂、されど噂	その2	
たかが噂、されど噂	その3	
たかが噂、されど噂	その4	
乙の章	絶交ルールの謎	
絶交ルールの謎	その1	
絶交ルールの謎	その2	
絶交ルールの謎	その3	
絶交ルールの謎	その4	

甲の章　たかが噂、されど噂 たかが噂、されど噂　その1

昼休み、真山 当麻は赤毛のツーサイドアップでどこか幼さが残る少女に声をかけられた。

「あのーレナちゃんと同じクラスの人ですよね?」

「そうですけど、どうしてそれを?」

「たまーにレナちゃんに話しかけてるのをなんとなく見るので・・・」

「はあ、それなら君は水波さんの友達ですか?」

「一応そうです。その・・・」

「その?」

「レナちゃんとケンカしちゃって謝りたくて、だからレナちゃんを見かけませんでしたか?あ、私は秋野かえでつてあります。」

「俺は真山 当麻です。で水波さんなら・・・」と当麻はレナが居た方を向くがしかし、

「あれ?さつきまであつちにいたはずなのに・・・」

そこにレナの姿は無かつた。

「え?そうですか、ありがとうございます。」かえではそう言つて立ち去ろうとするとあ、と振り向き

「もしレナちゃんを見かけたら私が探してるので伝えて欲しいです。」
と言いつていた。

放課後、委員会の手伝いで荷物を運んでいた当麻は隣で一緒に荷物を抱えていた金髪のポニー・テールの少女、十咎ももこに「なあ、聞いてよ当麻」

「どうしたんです十咎さん。」

「まあ愚痴みたいなもんなんだけど、また友達がケンカしちゃつてさあ」

「はあ・・・あ!もしかしてそれって水波さんの事ですか?」当麻はすぐさま昼休みに訪ねてきたかえを思い出す。
「え?どうしその事を?」

「実は昼休みの時……」昼休みの出来事をももこに話す。

「なるほど、それにしてもまさかかえでが来てたとはねえ」「そうなんですよ」

「なら、アタシからも頼むよ。なんか最近レナのやつ、アタシたちを避けてる気がしてからね、何があつたのか聞いてきてよ。」

「は、はい。」

その日の夕方、

「すまない、そこのアンタちよつといいかい？」

帰路につき始めた当麻に一人の青年が声をかけてきた。カメオの付いたループタイを首から下げ、黒いYシャツの上にオリーブグリーンのモツズコートを羽織り、ジーパンを履いてて、肩掛け鞄に髪は黒髪でボサボサ、そして猫背だ。

「何ですか？」

「少し聞きたいことがあつてね。……ああ、別に怪しいものじやない少し時間をくれないか？」

当麻は言われるがままに近くの公園のベンチに座る。

「聞きたい事つて何ですか？」当麻は早速青年に聞いた。

“絶交ルール”って聞いたことあるか？」

「まあ聞きかじり程度ですが、でも何故？こういうのは女子に聞いた方がいいと思いますけど……」

「俺は趣味でこういう都市伝説つてか怪奇じみた話を調べているんだ。それにこんな外見の奴が女子高生に話しかけてみろ、秒で通報されるぞ。」

「そうですよねえ……つてそれ、趣味なんですか？」当麻はこの状況も十分事案モノだろ、と思いつつ返す。

「ああ、普段は神浜大に通つてるんだ、でその制服は付属校のヤツか？」

「ええ附属校の中等部三年ですが……つてあなたの方は授業はいいんですか？」

「大丈夫だ。今日の分の講義はもう終わつてるから本題に入らせてく
れ。絶交ルールについて知つている事を教えてくれ」

仕方ないですね、と当麻は知っている事を話し出した。

”絶交ルール”

そんな噂が広まり始めたのはつい最近の話だつた。

独特的の語り口調だつたのによく覚えていた。

『アラもう聞いた？誰から聞いた？絶交ルールのその噂
ファンだ！キライだ！ゼツコウだ！つて言つたら見えないけどそこ
にある！

もしも仲直りしようとすると、連れて行かれてサータイヘン！
友達を落とした黒い少女に捕まると、無限の階段掃除をさせられ
ちゃうって、

神浜市の少女の間ではもつぱらのウワサ

ヒーコワイ！』

実際問題それは所詮都市伝説だしなにより非現実的だからあまり
信じはしない、というのを含めて当麻は話したがその青年は言つた。
「もしそれが本当の事だつたら？」

「そんな馬鹿な……たかが都市伝説、流行つてる噂ですよ」

「そうか……されど都市伝説、されど噂とも言うがな、じゃあもう一
つ質問だ。」

「周りにここ数日で行方不明になつた或いは来なくなつた奴はいるか
？」

「えーと……いやまさか……」

当麻は何か嫌な予感を感じた。確かに自分のクラスにここ数日現
れない生徒はいた、しかしこれがこの”絶交ルール”によるものなの
か……しかしそんなのはあり得ないと顔を上げると青年が
「図星だな、恐らくそういう生徒が出たんだろうな」

「だからそんなのがあり得るわけがないですよ」

「そうか……ありがとう。とりえず聞きたい事は聞けたから。おつ
とそういやまだ名前を名乗つていなかつたね。柴田しばた薰かおるだ。アンタ
の名前は？」

「俺は真山 当麻つて言います。」

「そうか、当麻、何かあつたらここにメールしてくれ

そう言うと薰はメールアドレスの書かれたを渡した。

当麻はどうも、と言いながら眺めた。

「いやー俺はトークアプリとかは本当に関わってる人間としか交換しないからこうしてこの手の連絡はメールで受け付けているんだ、じや何かあつたらメールしてくれ。」 そう言うと青年もとい薰は公園から去つていつた。

神浜アンノウンストーリーズ

story1. 甲の章 たかが噂、されど噂 その1

その日の帰り、バスの中で当麻はメモを眺めながら考えた。

もしかして水波さんが頑なに秋野さんに会わないようにしてるのはもしゃこの”絶交ルールの鎖のバケモノ”からかえでを守ろうとしてるからだろうか？

いやいや、所詮そんなの都市伝説だからあるわけ無いだろうと否定してみるがさつき公園で話した柴田さんの言葉が脳裏によぎる。

”されど都市伝説、されど噂だからな”

もし本当にそんな恐ろしい事が起きて いるとしたら？

クラスメートの最近来なくなつたヤツの原因が鎖のバケモノの仕業だとしたら？

でも・・・こんなのが噂、都市伝説だ。 そう言い聞かせメールアドレスの書かれた紙をポケットに入れ、顔を上げるとするとバスの乗客がこぞつてバスから降りてくるのが見える・・・

いや何かがおかしい！ そう感じてしまつて追うこととした。

急いでバスから降りてその集団に気づかれないように尾行する。

「な、なんだアレは・・・」

その客が何かに吸い込まれているのが見えた。

このままだと・・・最悪の事態が脳裏に浮かんだ・・・

「クソッ！ 追うしかない！」

当麻は急いでその集団を追う、どうにか最後尾の男にしがみついた

「生気がない・・・ばんなそかな・・・」

が

さらに急に周りの背景が変わった。

それは現代アートのようなサイケデリックな空間だ

「せめてこの人だけでも助けないと……」

どうにか男の人を背負い改めて周りを見回しながら

「うわあ……出口は何処なんだよ……ってかここはどこだ？」

と取り敢えず歩き始めた。が、

「 $\cdot \cdot \cdot \times \triangle + \text{手} \triangle F \rightarrow \circ n \times \cdot \cdot \cdot$ ！」

球体を繋げて二足歩行させたような“何か”が何語ともとれない声を上げ襲いかかってくる。

「ワツ！危な！」

当麻は間一髪交わすと一目散に走り始めた。

多分あの化物に捕まつたら終わりだ。

足の速さには自信はあったが、背中に男の人を背負っているのもあるのだろうか。思つたより早く走れない。

「あ、あそこなら隠れられるか」

どうにかちようどいい物陰を見つけ身を潜める事にした。

とりあえず背負つていた男の人をそつと下ろすと、

「とりあえず助けを呼ぶか」とスマホをポケットから取り出したが

「クソ、圈外かよ……」

はあー、とため息をつくと
ガギン！

何か物音がした。

「ゲッ見つかったか!?」とその方向を覗いた。

そこには

「てりやあ！」

「え？」

そこにはさらに信じがたい光景があつた。

大剣を持った金髪ボニー・テールの少女と、

ありきたりな魔法の杖を持つた赤髪ツーサイドアップの少女そしてトライデント状の槍を持つた水色のツーサイドアップの少女がさつきまで当麻を追い回していた化物達と戦っていた。

よく見るとそれは

(あれは・・・十咎さん?・・・あと確か秋野さんだつけ・・・?それ
にアレは・・・水波さん?つてなんだあの格好?日曜の朝か?)
脳内の?マークは一向に増えるばかりだ。・・・いやこうなればや
ることは一つ

「すいませーん!助けてくださいーい!」

めいっぽい叫んで腕を振つた

「ももこちゃん!レナちゃん!あつちに誰かいるよ!」

当麻に気づいたかえでは他の2人に声をかけた

「何だつて!」

「ちよつと何よ!?」

「ほらあそこ!」

異形と戦いながら2人はかえでが指差した方向を向くと

「ええつ!なんでアイツがここに!」

「当麻!何してんだ!とにかくすぐ助けに向かうから!」

敵を大剣で薙ぎ払いながらももこは叫び返した。

「つて言つてもどうすんのよももこ!まだまだ使い魔は多いわよ!」

「アタシが助け行くからレナとかえでは援護をたのむ!」

「ももこちゃんそれは無茶苦茶だよ・・・」そうつぶやくかえでを尻目に
にももこは

「おりやーつ!」大剣を振りながら当麻の元へ向かつた。

「大丈夫か当麻?それにその人も・・・」

「その人は寝てるだけです・・・つていうかもう何が何だか・・・これ
夢ですかね・・・」

「え、えーと・・・」ももこはなんとも言えない表情を浮かべるが

「なんだつて!?今行く!」と急に険しい顔をすると

「あ。当麻、もう少し待つてて!」と残りの2人が居た方向へシユタツ
と飛んで行つた。

「マジか・・・」

それから当麻が見たのはさつき自分を追つてきたり、ももこ達が
戦つていた化け物の親分と思えしき大きな化け物と戦う3人だつた。

どうにか3人が化け物を倒すと

「あれ？さつきまでのあの空間は？疲れてたのかな俺・・・」しかし足元にはさつきまで背負っていた男の人が相変わらずグツタリした様子で寝ていた。

「十咎さん！水波さん！秋野さん！助けてくれてありがとうございます！」

男の人をそつと置いて3人のもとへ駆け寄ると

「もう！かえでも足引つ張らないでよ・・・」

「あれはレナちゃんも勝手に突撃するのも悪いよお」

「まあまあ二人とも・・・」

レナとかえでが言い合っているのをももこが仲裁している真つ最中だった。三人ともあの衣服ではなく、見慣れた神浜市立大学付属学校の制服だった。

「それはどういたしまして！」ももこは一人をなだめつつ言つた。

「待つてください！まだ聞きたいことが！」

「そ、それはまた今度！」ももこは自分が悪そうな顔を浮かべながら二人とも調整屋に行こう、と2人を連れて何処かへ去つてしまつた。

その去り際レナが「アイツは・・・ホントお人よしなんだから・・・とつぶやいた。

「結局アレは何だつたんだろう・・・って早く帰らないと！次のバス何時だっけ！」

やつべ、と当麻は来た道を戻つた。

to be continued・・・

たかが噂、されど噂 その2

「アレは何だつたんだ・・・」

その日の夜、当麻はある出来事を振り返った。

片想いの相手が、よく見かける先輩が、仲間と共にまるでアニメや漫画で見るような格好をして前衛アートのような異形の怪物と闘っていた。

「あ！あの公園で会った柴田さんだっけ？　の人なら何か知ってるかもしれない！」

あの人は趣味でそういう都市伝説や怪奇現象とかを調べていると言っていた、それならこの手の話も幾らか知っている筈だ！

と慌てて制服のポケットからメモを取り出すとスマホでメールを打ち始めた。

内容は自分が夕方話しかけられた真山当麻だということ、そして帰りに遭遇したあの出来事の大まかな説明。すると数分で返事が来た。

『そうか、それなら詳しく述べたい。明日授業が終わつた後、学校附近のナストに来れるか？』

「やつぱり知つているのか・・・」

と呟き、16：50頃には来れそううそと返信するとスマホを充電器に挿して寝た。

神浜アンノウンストーリーズ

story2・たかが噂、されど噂 その2

次の日、授業が終わりファミレスへ向かうと窓際のテーブル席に薰がいた。

モツズコートは椅子に掛けている。それどころかパフェを平らげてカフェオレを飲んでいた。

どうも、と会釈をして椅子に座ると早速薰は言つた。

「当麻、だつたか。待つてたよ。俺は高いものを奢ればしないからな」「そんな全然奢つて貰わなくとも」

「とはいえ、ドリンクバー程度なら奢るがどうする？」

「じゃお言葉に甘えて。」

当麻はドリンクバーを注文しコーラを取る。

「じゃ本題に入るか。」

「はい、お願ひします。」

「当麻、アンタは昨日恐らく、いや確実に魔法少女と魔女に遭遇した。」

「はい？」

「まあいきなり言われてもピンと来ないよな」

「そりやそうですよ」

「さて、どう説明したものか・・・」うむむと言いながら薫は考える、やがて椅子に掛けてあつた肩掛けカバンから紙とペンを取り出するとパパっと絵を描き始めた。

「じゃ、この絵を見てくれ。」「ああ！昨日もこんな感じでした。」

薫の描いた絵は簡易的ではあるが、昨日の光景に似ていた。

「まず、これが魔法少女。でこつちが魔女だ。」

薫は武器を持つた少女の絵と異形の大きい化け物の絵をペンで指す。

「どつちの事から知りたい？と行きたいところだが、この二者の関係上、まずは魔法少女について説明しよう。」

「はい。」

「まず魔法少女ってのはこのキュウベえつてこの生物、つつてもこの絵はあくまでも魔法少女から聞いた俺のイメージでしかないがな」

薫は紙に書かれた白い猫とも狐とも犬とも取れない生き物の絵を指す。

「可愛いマスコットですね。」

「こいつは・・・なんと！願いを1つ何でも叶えてくれる！」

「お、おお」

「その代わりに魔法少女として魔女と戦わなきやいけないって訳だ。あと魔法も使える。」

「なるほど。」

「しかしモノを買うときに代金を払うように、力つてのは代償が付き物なんだよ。」

「代償、とは？」

「これだ……つってもわからないか」

次は装飾の施された卵型の宝石の絵を指す。

「このソウルジエム、端的に言えば変身アイテムだ。」

「なかなかきれいですね。」

「まあ色々な形があるからな、つてのは置いといて、とにかく魔法を使えば使うほどこれが濁つていく。」

「エネルギーを消費するつて、事ですか？」

「まあそういうことにしておこう。これが濁りきると」と

「きると？」

「魔法が使えなくなる……そして最悪の場合死に至る。」

「なんて重い……」

「ま、なんでも一つ願いを叶えられるのであれば、俺は妥当と思うが。」

「で、この濁りつてどうにかならないんですか！」 当麻は思わず言った。

「それでこれだ」 薫はすぐさま装飾の施された黒い球体の絵を指す。
「グリーフシード、魔女を倒すとこいつが手に入る。で、こいつを使って濁りを取る訳だ。つつても無限ではなくコイツは使い捨てだけどね。」

「よかつた……」

「つてのが魔法少女だ。分かつたか？」

「は、はい。なんとなく。」

「じゃ、次は魔女について。」

「お願ひします。」

「はい？」

「そもそも魔女は基本、結界つていう自分の巣に引きこもつてている。」

「ああ、あのサイケデリックな空間ですか。」

「そうだ、魔法少女はこの結界を感じして、入り込むことができる。ま、そうでもしなきや魔女退治も大変だからな。」

「じや普通の人人が結界に迷い込んだらどうなるんですか……」

「だいたい死ぬ。」

「え？」

「だから当麻、アンタはたまたま助かつたんだ。普通なら死んでたかもしれないんだ。」

「死因は色々、使い魔っていう手下に殺されたり、結界の罠にはまつて死んだり、魔女自体に殺されたりもした人もいたと聞いた。」

「は、はあ」

「そして何より、魔女は呪いを振りまく存在だ。」

「どういうことですか？」

「魔女はたまに普通の人を魅入る。魅入られるとあら不思議！操られるように集団自殺や事故を起こす。」

「だからあの時生気がなかつたんですか・・・」

「ま、魅入られないように気を付ける事だ。」

「は、はい・・・ってか魔法少女しか対処できないんですか？」

「まるで怪異の専門家を見る目で聞いてきて・・・まあ、魔女や使い魔は普通の人間でも対処できない事は無いんだけどね。これはその時が来たら話そう。」

「は、はあ・・・」

「以上が魔法少女と魔女についての大まかな話だ。」 そう言い、 薫はすっかり冷めてしまつたカフェオレを啜つた。

ふうやつと終わつたと当麻も炭酸の抜けたコーラを飲んだ。すると、

どすこい電話だよチエキラ♪どすこい電話だよチエキラ♪
変な着メロが聴こえた。

「あ、マナーモードにするの忘れてた。」 どうやら薰のものだつたようで薰はスマホを取り出した。

「え？なんですかその着信音？」

「あと歌は気にするな。ってことで離席させてくれ。」 薫は席を離れた。

「もしもし？ 薫さん？」

「なんだ情報屋か。どうした？」

「薰さんがどうしてるかなーって、で、また例のうわさの聞き込み?」

情報屋、と薰に呼ばれた少年の声は尋ねた。

「いや実は・・・」

薰はさつきまで真山当麻という少年が魔女に巻き込まれて魔法少女に助けられたということ、そして当麻に魔法少女と魔女について話していたことを言つた。

「フーン。折角だから彼に会つてみたいね。今から調整屋こつちやに来れる？」

「俺は来れるが当麻は何て言うか。少し待つてくれ。」電話を保留状態にすると再び席に戻る。

「当麻、電話の相手がアンタに会いたいかこつちに来れないかつて聞いてるが、この後時間はあるか?」

「ええ、いいですけどどこまで?」

「調整屋だ」

「調整屋?」

「まあ、魔法少女関連で色々やつてる所だ。説明は向かいながらするとして、調整屋はこの新西区内だからそんなに遠くないはずだ。で結局行けるのか?」

「・・・ああ、新西区内ならいいですよ。」当麻はスマホの時計を見ながら答えた。

「そうと決まれば早速行くか」

「もしもし、本人も了承したから至急そつちに向かう」保留を解除して手短に答えを話す。

「あいよ、待つてるよ。」と情報屋は電話を切つた。

会計を済ませ調整屋に向かいながら当麻は聞いた

「で、結局調整屋つて何者なんですか?」

「さつき言つたソウルジエムを弄ることで能力を引き出したりできる魔法少女がやつてる店。」

「え、そんなこともできるんですか?」

「その代わり当の本人は戦闘能力は皆無だし、あの中は完全中立地帯

だ。」

「つてかアレ重要そうなのに弄っちゃって大丈夫なんですか？」

「知らん、失敗しない程度にやるんだろう。」

「それならいいんですけど・・・」

「着いたぞ。」 そう言つた二人の眼先には

「え？ ここつて廃墟じや・・・」 神浜ミレナ座と書かれた使われていな
い施設があつた。

「ま、一見はな。ほら、入るぞ。」

「は、はい！」

「あ、中は意外ときれいだ。」 廃墟の中に入つた当麻はそうつぶやくと
「あら、薰さんじやないの。おそしてそこの子が例の彼ね」 燕尾服を思
わせるような衣服を着た銀髪の少女と

「あー、薰さん、来たんだね。例の彼も一緒で。まあとりあえず座つた
ら。」 ソファにメガネをかけ、学生服にパークーを着た前髪だけ金に染
めているに七三分けのボブカットの少年がタブレットPCを弄りな
がらソファに座るよう促した。

当麻と薰はソファに座ると

「君のことはさつき電話で薰さんから聞いてるよ、当麻君。僕は情報
屋の近藤 直樹。呼び方は情報屋でも直樹さんでもお好きに。そし
てあつちが」

「わたしは調整屋をやつている八雲みたまよ、気軽にみたまさんとで
も呼んでくれると嬉しいわあ」

「みたまさんに直樹さん、よろしくお願ひします。」

一通りの自己紹介をすると直樹は

「まあ、当麻君。なんというか災難だつたね。」

「そうですよ・・・悪夢だと思いましたよ。」

「ところがどつこい夢じやないんだよねえ。まあ君は死ななかつただ
けラッキーだよ。」

「確かにそうですけど。」 はあーとため息をつく

「そういうえば薰さん、うわさの調査の進捗つてどうなつた？」

「ある程度全貌は分かつた、うわさが実在する可能性がグンと上がつ

た。」

「どうして上がつたんだい？」

「彼だよ。彼から行方不明者が聞いたんだ」 薫は隣に座る当麻の方を向いた。

「なるほど」

「え？……ああ、昨日のアレですか。ってかそうなんて言つてませんよ」

「いや、あの態度は言つてるも同然だ。で、あれからまた学校を休んだやつとか出たか？」

「まだですけど……ただ」

「ただ？」 今度は薰が聞き返す

「その昨日……」

レナとかえでが喧嘩してレナが絶交だと言い出すほどになつていて、その事でかえでやももこが相談をしてきたという話をするとみたまが

「あらあ、確かにここ数日はももこがレナちゃんとかえでちゃんを宥めながら来ることが多かつたわよお、それに当麻君があの三人と知り合いなんて驚いたわあ」

「ま、まあ学校同じですし、」

ふーんとみたま達が相づちを打つていると

「おつす調整屋ー！……つて当麻！それに薰さん！？」

「え！十咎さん!? なんでここに……あ、魔法少女だからか。」

「なんだ噂をすればなんとやらつてやつか」 薫も反応した。

ももこがやつてきた。しかもその横には桃色の髪を後ろで軽くまとめた少女がいた。制服は当麻たちの着ていたものとはまた違つていた。

「あらあ、久しぶりね、ももこ、最近来ないから寂しかつたわ。」

「嘘つけ、客も多くなつて、思い出す暇もないし、どうせ情報屋も一緒だつただろ？」

「そんなことないわよお？で、そこの当麻君とは知り合い？」

「ま、まあね」

「あ、あの、この人が調整屋さんですか？」割り込むように桃色の髪の少女が口を開いた。

「あ、そうだつた今日はアタシじゃなくて新しい客の紹介だ。」ももこは本来の用件を思い出し、言つた。

「どうもー調整屋さんです。八雲みたまつて言うのよ？以後、ご贔屓にして頂戴ね。」

「え、あ、はい……ところで、あつちの人たちは？」少女はソファに座つていた当麻たちのほうを見ていつた。

「まず、メガネをかけてるのが」とももこが言いかけると「自己紹介ぐらい自分でするさ、僕は情報屋の近藤直樹。こちらも『こちらも』こちらも」ソファから立ち上がり言つた。

「あ、俺は真山当麻って言います！十咎さんと同じ学校です！」ハツと当麻も立ち上がり言つた。

「……あ、これ俺も自己紹介しなきやいけない感じか。俺は薫、柴田薫。」ソファに座つたまま振り向き薫は言つた。

「まあ、皆そんな悪い人ではないから。それはアタシが保証するよ」ももこが付け加える。

「は、はあ……」気になることはまだあつたが少女は返した
「ところで、まだあなたの名前を聞いてないわあ」みたまは話を引き戻そうしたのか少女に聞いた。

「あ、そうでした！私、環たまきいろはって言います。よろしくお願ひします！」少女、環いろははそう名乗つた。
「で、調整屋。本題に入るけど」

「なあに？」

「そのいろはちゃんのソウルジエム、ちょっと弄つてあげてよ

「え？本当にそういうことができるんですか？」ソファに座りなおした当麻は尋ねた。

「ほら、当麻も興味を示してんし頼むよ。」

「あら、軽々しく言うけど、お代はもちろんあるのよね？」
「もちろん、アタシが持つよ！」

「じゃ、ついでに見学料もいただこうかしらあ」

「え、それでお金取るんですか？」当麻は聞くが、

「いや多分調整屋ジョークだから気にしない方がいいよ」すかさず直樹が突っ込む。

「は、はあ」

「ちよ、ちよっと待つてください！もも、さん！……あの、その、助けてもらつた上にそんな……」いろはは何か後ろめたさを感じていた。

「まあまあ、こういう時はお互い様さ、それに、ほら、こういう時は喜ぶもんだよ」

「はい、ありがとうございます！」もも、に言われいろはは微笑んだ。「で、その、ソウルジエムを弄るつて……？」

「そうそう！それってどうやつて？」いろはに続き、再び立ち上がった当麻も聞いた。

「ふふつ、それはね、」

「それは!?」

「あなた、いろはちゃんのソウルジエムにわたしが触れるつてこと。そして、他の魔力を注いだりい、潜在能力を引き出したりするの。」「ほら、さつき言つた通りだろ？」

当麻の隣で薫が言う。

「でもほんとにそんなことが……？」今度はいろはが口を開いた。
「一度経験、見学するとびっくりすると思うわよお」

「そんな馬鹿な」当麻も口をはさむ

「いやいやほんとにびっくりするからね、さつく始めちゃいましょう」

「あつ、はい！」

「それじゃあ服は脱いで、そこの寝台に横になつてねえ」

「はい、わかりま……脱ぐ!?」

「ばんなそかな……つて事は？」

「脱いだ服はそこのカゴに入れて、そして、当麻君には悪いけど、男子たちはいつたん出てつてねえ」みたまは笑みを崩さないまま言つた。
「は、はあ……」しぶしぶ外に出ようとすると

「おいおい調整屋、ジョークもほどほどにな」

ソファに座つたままの薫が振り向き、再び言つたが。

「わかりました!!」意を決した表情でいろはは言う

「分かるな!!」

「つたく・・・調整屋、いじめるのもほどほどにな」

「つてことで嘘でしたー」とみたまは言つた。

「ええ・・・」いろははなんだか興ざめし、

「よかつた・・・」当麻は安堵した。

「はい、そうリラックスしてー・・・しんこきゅー」

「すーーーーーはーーーーー」

「ゆつたりい、身を任せてえ・・・大地に沈んでいく・・・しづかにー・・・」

「はあ・・・」

「なんか催眠術というか暗示をかけてるみたいですね」寝台に寝てみたまの言われるがままにするいろはを見た当麻は言つた。

「まあまだ見せ場じゃないからな」となりに居る薫が言う。

「つてかこれってあんまり見世物じゃない気がするけどなあ」

「まあまあわりとみたまはノリノリだつたらしいんじやない?」

「ももこ」に対し直樹がケケツと笑いながら言つた。

「それじゃあ、ソウルジエムに触れるわよお」そう言いみたまはいろは手元にあつた卵型のそれ、ソウルジエムに触れた。ソウルジエムはまばゆい光を放つた。

そしてくつ・・・といろはが何かに堪えるとそのまま泥のように眠つた・・・

しばらくしてソウルジエムから放たれた光が消え、いろはが起き上がつた。

「あ、」

「どうやら終わつたようだね」

「どう? 体の調子はいい感じかしら?」起き上がりたいろはにみたまはさつそく聞く

「えっと・・・さつきよりずっと良いです」

「フフッ、それなら成功ね、最初は体がだるく感じたり違和感があるかもしれないけれど、しばらくすれば少しづつなじみ始めるから」

「はい、ありがとうございます！」説明を聞いたいろはは返す。

「で、」

みたまは当麻の方を見ると、

「当麻君は見ててどうだつた？」と聞いた。

「なんか・・・すごく神秘的でした」当麻は愛想笑いをした

「そう、それならよかつたわあ・・・」みたまは安堵したが・・・

「ん？どうしたんだよ調整屋、急に神妙な顔しちやつてさ。」さつきの柔らかな表情から一変、神妙な顔を浮かべた。

「さては調整屋、なにかヤバイものでも見たな？」薫が言つた。

「え？それつていつたい全体どういうk」

「あら。薫さんは全部まるつとお見通しなのね？」当麻を遮りみたまは言つた。

「なんだビンゴなのか」

「そうか、当麻君といろはちゃんには言つてなかつたけど、彼女は”調整”をするときに客の過去が見えるんだよ」？マークを浮かべる当麻といろはに直樹が教えた。

「なんでそんなこと知つているんですか？」

「情報屋だから。」当麻を適当に直樹があしらう。

「そう、彼の言う通りよ」

「つてことは・・・」

「いろはちゃんの過去もみえたわ」

「え・・・」

「で、調整屋、アンタは何を見たんだ？」薫が水を差す。

「さすがにそれは言えないわ。」

「とかか・・・」

「とにかく、勝手に過去を見たのは悪かつたわ。」

「でも一つ質問させてほしいの・・・あなた、何を願つたの？」

一瞬場が凍り付いた。

「わたしたち魔法少女が契約するときに叶えてもらつた願いよ……」

「はい、もちろんです。私は……」

「私は？」なぜか当麻は言う。

「私は……」

「私は？」

「あれ？ 頼い事……」

「え？」

「あつ……はうツ！……まだどうして!?」 いろはは急に苦しみだした。

「いろはちゃん！」

「環さん！」

当麻とももこは叫んだ

「本当に調整は成功なんですか!?」 そして当麻はみたまに言つた。

「上手くいつたはずよ……なのに……」

「あの子は誰……？ 私の願いと何の関係があるの……？」

「ごめんなさい。苦しめる気はなかつたの……」 みたまは謝罪した。

「あの小さいキュウベえ、やつぱり私と関係があるんだ！」

（小さいキュウベえ？……なんだそれは?） 薫はいろはの言葉に違和感を覚える……

「エクセレント……そりや調整屋が不思議がるわけだ。」 やがて薰はにやりと笑いながらつぶやいた。

「あのー薰さん?」

「あの感じは多分薰さんのアンテナに引っ掛けたんだ。」 当麻の疑問に直樹が答える。

「小さいキュウベえとか言つてたがアンタ、そいつを探しているのかい？」 薫はいろはに問い合わせた。

「え？ はい……あのー！ 何か知つてるんですか？」

「質問を質問で返すな、キュウベえは知つてゐるが、その小さいつてのが気になつて。そんな話誰からも聞いたことなかつたからね」

「ですか……」

そしていろはは何かを決心したように言つた。

「やつぱり行つてきます！」

「いろはちゃん！まだ外に出ちゃだめだ！」ももこは止めるが、「小さいキュウベえ、だろ。アンタは自分の願いの正体をそいつが握っているんじやないかって考えた？違うか？」薰が口をはさんだ。「あー、これは完全にスイツチ入つてるよ……」直樹が小声でつぶやく「そうです！私、小さいキュウベえを見てからおかしくなつたんです！知らない女の子の夢を見て、そのたびに胸がざわついて愛おしくなつてもう……」

「もういい、アンタの事情はなんとなく分かつた。その夢の正体を知りたい、だろ？」薰はフツと笑つた。

「だから行つてきます!!」

いろはは走つてその場を立ち去つた。

そして、

「当麻、こうしちやいられない！追うから手伝え！」

「え？俺もですか！情報屋さんとか十咎さんじやダメなんですか？」

「いいから行くぞ！」言われるがままに当麻も薰と共に走つていつた。

3人が続々と走り去つて一瞬の静寂のあと、ももこは

「しまつたあああああああ！！」

「どうしたんだい？何かまずいことでも？」いつの間にかはソファに座つたは直樹はももこに言つた。

「まずいよ！いま外に出たら三人ともアイツにつかまるのに……」

「はあはあ……つてあ！薰さん!!あれつて……」当麻はいろはが路地裏に消えていくのを見つける。

「いろはだな、間違いない。行くぞ。」薰たちもいろはが消えた方面へと走る。

その頃いろはは……

「もしかしてあの時の……？」

紺色の髪の少女、というよりは女性に遭遇していた。どうしても先を急ぐなら自分を

「そう、まだ意識があつたのね。邪魔が入つたおかげで遅くなつたけ

「どうまなら心置きなくあなたを町から追い出せる。」

はいはに對しこう告げた。

「町から・・・追い出す・・・?」

to be continued . . .

たかが噂、されど噂　その3

「町から・・・追い出す・・・？」紺色の髪の女性からそう告げられた
いろは。そこに

「オイオイ、だれかと思ったらやちよじやないか」バサツとわざとらしくモツズコートを翻した薫と、

「そんな追い出すだなんて！」当麻が現れた。

「え？ どうして・・・」

神浜アンノウンストーリーズ

story3. たかが噂、されど噂　その3

「薫・・・貴方、何しに現れたの？それに、彼は仲間？」

「まあ彼は仲間つてか協力者つてどこかな？」

「そう・・・で、結局のところ、目的は？」

「彼女、環いろはの抱える謎に興味があつてねえ、実にエクセレント、と言つたところだ。で、やちよ、アンタは彼女をこの町から追い出すつて言つたね。どうして？」

「薫さんつてあの人と知り合いなんですか？」

「俺に聞くなよ・・・」

いろはと当麻がひそひそと話すのを尻目に女性と当麻の会話は続く。

「彼女はこの町で生き残れる力が無いのを証明してしまつたのよ。」「どうしてそんなことが言える？」

「彼女が魔女の結界の中で無様にやられている姿を見たのよ。」

「じゃ、それをアンタが助けて忠告したわけか？」

「概ねそんな感じよ。とにかく彼女には無理やりにでも出て行つてもらうわ。」

そう言つてやちよは薫の横を通り過ぎた。

「あの様子じゃダメかあ・・・」

「さ、自分の街に帰りなさい。」

「やっぱり考え直した方が」後ろから薫が口をはさむが

「薫は黙つてて。」

「嫌です……私、目的があつてこの町に来たんです！」

「そうですよ！追い出すなんてあんまりですよ!!」

「……貴方のような一般人に言われる筋はないわ。」

「うう……」やちよの反論に当麻はひるんだ。

「それに目的も果たせずに無駄死にしたい訳なの？」改めてやちよはいろいろはに質問した。

「でも、調整屋さんにソウルジエムを弄つてもらつたのでもう大丈夫です。」

「はあまたももこのお節介ね……」

（え？ ももこ……つてことはこの人は十咎さんとも知り合いなのか？）

と思う当麻と

「はあ、それなら……」

「通してくれるんですか!?」期待するいろはの前でやちよは、「かかつてらつしやい」パツと光に包まれ、私服から青を思わせるドレスにアーマーが付いたコスチュームに姿を変えた。

「わつこの人も魔法少女だつたのか！」

「貴方がこの町で生きてこれるかどうかは、私の目と腕で判断するわ。」

（なるほど……そこまでして追い出したいのか）「当麻、危ないからこつちに来い。」

「え、あ、はい！」こそそと当麻は薫の元まで行く。

「俺達は見物でもしよう。」

「で、でも……」

「安心しろ。ヤバくなつたら俺が止める。」

「止める手段は」

「ある」

「どこから湧くんですかその自信は……」

「それにやちよなら、脅しはしても、流石に殺しちゃないだろう。」

「ホントですか……」

いつの間にか白いフード付きマントを羽織つた魔法少女姿のいろ

はとやちよの戦いはほぼ一方的だつた。

「あ一流石やちよだ。戦い方にスキが無い・・・」

「何解説してるんですか」

「うわ！」やちよの槍攻撃でいろはは防戦一方だつた。

「所詮は付け焼刃ね。強化しても経験は追いつかないわ」

「お願ひです！小さいキュウベえを探しているだけなんです!!」

「薫が興味を示したのは・・・なるほど、あなたなら近づけられるのね・・・でもいい加減あきらめなさい!!」

「どうするんですか！薫さん！」

「まーそろそろ止めに入るか」当麻の慌てようには反しのんきに薫が立ち上がろうとすると・・・

「まで――――――い!!!!」

ダツといろは達の現れたのは

「いやはや、追つてきて正解だつたよ」

ももこだつた。

「十咎さん!?」

「ももこさん?!どうして?」

「どうせ心配で追つてきたんだろ？アンタのことだ」薫が言う。

「ああ、やちよさんがいろはちゃんを襲うのは予想してたからね。・・・

にしても趣味の悪い女だよ・・・」やれやれ、とももこ。

「この町に無駄な死体を増やしたくない、それだけよ。」

「はつ、よく言うよ！大方、魔女の数が減るからだろ？それに魔法少女が増えれば自分の取り分も減る。だから力づくで追い出そうとしてるんだろう」

「マジかよ・・・」ももこの自信満々の推理に当麻はつぶやいたが、

「ももこ、残念ながらその推理は違う。」異を唱えたのは薫だつた。

「な、なんで？」

「この間情報屋に聞いた話だが、どうも魔女は右肩上がりで増えていいって聞いてな。むしろ人が必要な気がするがどうだ？やちよ、アンタは本当に死体を増やしたくないだけだろ？」

「まあ、そうね。いい加減、誤解されるのも気分のいいものじやないし

ね。」

「……とにかくやちよ、何をしたって彼女は退く気はない。だろ？」
薫はいろはの方を見た。

「そうです……私はただ本当に小さなキュウベえを探しに来ただけなんです」

「小さいキュウベえ……そう、貴方なら近づくことができるのね……」「やちよもその小さいキュウベえを探してたのか。」薫はそうつぶやく

傍らで、やちよはいろはに向かって

「で、あなたはその小さなキュウベえをどこで見かけたのかしら?」と
聞いた。

「えっ、あの、砂場の魔女の結界です……」

「ま、魔女の結界?」当麻は反応した。

「そう、それじゃあこうしましよう。砂場の魔女を先に倒したら実力を認めるわ。ハンデとして私はひとり、そつちはタツグで構わないわ。これで、どうかしら。」というやちよの提案に

「乗つたー!!」ももこが声を上げた。

「ええっ!?

「そんな十咎さん……本人を差し置いて無茶苦茶なことを……」いろはと当麻は口々に突っ込む

「認めてもらいうなんてそんな……私は小さいキュウベえさえ見つかれば……」

「これであの堅物が認めてくれるなら安いもんさ!!それに勝てば自由に探し回せるだろ?」

「は、はあ」

「なるほど、ももこにしては考えたな」押されるいろはの横で薫が口を開いた。

「にしてはつてなんだ!?つてか薫さんと当麻はどうするのさ?」

「そうだな、勝負事には1人でも多くの証人が必要じゃないか?」ももこの質問に薫は答えた。

「それってつまり俺も……ですか?」当麻は言う。

「そうだ。なかなか察しがよろしくてよ」

「なんでお嬢様風?」ももこのツッコミをよそに

「ええまたあの空間に行くんですか?嫌ですよ!」

「そうよ、流石に素人を連れて行くのは危ないわ。」

「安心しろ、護衛が4人もいるじやないか」薫は嫌がる当麻と止めようとするやちよに言つた。

「4人?つてまさか薫さんも戦えるんですか?」当麻の質問に

「さてどうでしようね・・・」やちよと

「まあ俺は魔法が使える訳でもなければS P O C ホルダーでもないんだけどね・・・まつそれは後でのお楽しみってことで」薫が答えた。

「で結局どうするのよ」やちよの質問に

「じゃ、この責任はすべて俺が受け持つてことでいいだろやちよ。」

「・・・本当に受け持つつもりね」

「そうだ。」

「・・・じゃ決まりね。」

「決まりだ。やるぞいろはちゃん!やちよに続いてももこがいろはに向かつていった。

「はい、わかりました・・・」いろはは若干食い気味に答えた。

「はあ・・・マジか・・・」当麻は小声でつぶやいた。

「ありました、ここです」いろはに案内され、結界の入り口にやつてきた。

一見そういう落書きともとれるソレは今にも吸い込まれそうな気配を感じた。

「魔力はどうだ?」

「まあそこそこつて言つた具合かな薫さん。」魔力を持たない薫の問いかけにももこが答えた。

「しかし思つたよりも歩かされたな」結界を凝視しながら薫は言つた。「さすがに複数の魔法少女に狙われたら逃げたくなるわよ。」

「なら、なんでさつき環さんをあんなにボコボコにできたんですか?」

「そりやさつきの相手は小物一匹だから気が大きくなつてたんじやない?」当麻の問いかけにやちよが答える傍ら

「小物……」いろはは顔を曇らせた。

それに反応したのかやちよは「だからその分のハンデは付けたつもりだから、ももこと二人で頑張りなさい。強くなつた実力とやらをせいぜい発揮してね。」といろはに向けて言つた。かと思うと薫の方を向き、

「薫もそろそろアレの準備をしておいた方がいいんじゃないの?」

「いちいち鼻につく言い方だな」ももこは愚痴る。

「はいはい、今出そうと思つたところだ。」そして薫はそう言いながら肩掛けカバンから何かを取り出した。

「え……それって……」取り出されたものをみて当麻といろはは絶句した。

「ピ、ピストルですよね……」

「あ、本物だけど何か?」いろはの質問に何食わぬ顔で答える。

「へー本物……つて本物!?!」

「嗚呼、本物だ。」

「こいつに特製弾をこめて……」

「ま、まさか、それで魔女とやりあうつもりですか!?」準備をする薫を尻目に当麻は聞くが

「そうでもしないと普通の人間は魔女とやりあえないからな。それにこの弾も対魔女およびその使い魔用の特注品だからね、俺はこれに幾らはたいたと思つてるんだ。」相変わらず顔色一つ変えず薫は答える。

「え、ええ……」

「ああ、さつき言つてたもしかして魔女に対抗するもう一つの方法つてのは……」

「強力な物理攻撃を浴びせる。この手に限る。」カシャ、と弾の入ったマガジンをピストルにセットしながら薫は言つた。

「な、なるほど」と食い気味に当麻が相槌を打つていると
「薫、置いていくわよ」
「当麻も早く!」

「やちよとももこに呼ばれるので

「さて行くか……」

「え、本当に大丈夫なんですか・・・」

「なあにちょっとした探検だと思えば大丈夫だ。」

「は、はあ」

「とにかく、絶対に俺から離れるなよ」

「はい！」

薰の警告に勢いよく返事をした。

「うわあ・・・改めてきても氣味の悪い空間ですねえ・・・」結界に突入したなか当麻が感想を漏らしているのよそに

「じゃ行くぞ、先に親玉、魔女を倒した方が勝ち、いいね？」

はい、とか分かってるつて、とか各々の返事が聞こえる中「じゃゲットセット・・・レディ・・・ゴー！」薰の合図で一気に3人は走りだすが・・・

「あのなんで英語なんですか？」

「別にいいだろさて、・・・さつそく追いかけるぞ」薰が当麻のツツコミをあしらい言つた。

「え・・・」

「当たり前だろ審判なんだから」

「万が一魔女に遭遇したら?」

「その時に考える。」

「大丈夫ですか?」

「大丈夫じやなかつたら今頃死んでるよ」

「ま、まあ確かに・・・」

「さつ行くぞ」

「・・・あ、はい！」と2人も走り出した

「おつと」

「あれ? 環さんに十咎さん?」

2人は使い魔に囮まれて いるもものいろいろはを見つけた。

「まさかあんな序盤で苦戦してるとはね・・・危なっ！」

「わっ！」

薰はこつちの気配に気づいて襲つて来ようとした使い魔に3発発砲した。使い魔はうめき声をあげて倒れた。

「はあ人が喋っているのにマナーも知らないのか」

「あんなのにマナーなんてあるんですか」 薫と当麻はぶつぶつ言いながら体制を立て直すと、

「モキユ！」 何かの鳴き声がした。

「薰さん！ 今の鳴き声って」

「かわいらしい鳴き声……もしや」

「十咎さんたちの方からですね」

「行つてみるか」

2人がいろはたちの方へ駆け寄るとそこには

「モツキユ！ モキユ！」

「あ！ 薫さん！ 当麻、これ見てよ！」

手招いているももこの方を見ると白い生き物……キユウベえがいたが、

「これがあの……キユウベえ？ なんかイメージより小さいというか幼いというか……」

「エクセレント、こいつがいろはの探してた小さいキユウベえだな？」

「は、はい！」

「モキユモキユモキユ！」

「なんだつて？」

「それが、魔女のところまで案内してくれるって……」 いろはは小さいキユウベえを指さし言つた。

「……この子がですか？」

「そうです、でも……」 いろはは当麻の聞き返しに後ろめたそうに答えるが、

「信じてついていけば？」 薫が口をはさんだ。

「そうだよ！ 今は魔女を狩るのが最優先だ！」

「モツキユ！ モキユ！」

「ほらチビスケもそうしろつて！」 ももこは小さいキユウベえの意思を汲んで言つた。

「え、チビスケつてこの子の事ですか？」

「え？ ただけど？ ……つて今はそんなことはいいよ！ とにかく今の

状態じゃアイツに追いつけないし、ここは賭けるしかない！そりだよ
ね薰さん！」

「ももこにしてはグッドアイデアだ」

「そうと決まればさつそく行くぞ！」

「はい！」

そうして4人と1匹は走り出したが

「あの、ホントに大丈夫なんですか？」当麻の質問に

「だから賭けなんだ。」薰が返した。

to be continued . . .

たかが噂、されど噂 その4

小さいキュウベえに導かれるがままに4人は結界の最深部の入り口にたどり着いた。

「なんか一気に雰囲気が変わりましたね、なんか、こう禍々しさが増したというか」

「そりやここから先は魔女のプライベート空間だからね、しかし本当に案内してくれるとは・・・薰さんは？」

「エクセレント、もつとコイツに興味が出てきた。」

「・・・つてか追いつかれる前に突入したほうがいいよいろはちゃん！」

「え？あ、はい！」ももこに対して勢いよくいろはは返事をし、

「薰さん、やっぱり俺たちも」

「勿論追うぞ。」そして当麻の質問に対してもが答えた。

「ジャギギ▲◇○○◇▼☆ー！」

「えっ!?」

「いろはちゃん避けて！」「危ない！」入つて早々いろはを魔女が襲い、ももここと当麻が日々に叫ぶ

「うわあ！」いろはが防御の体制を取ろうとすると、ビュン！

魔女めがけて魔力波が飛んできた

「え。今のは・・・」困惑する当麻をよそに

「・・・やつぱ来たか。・・・いや、もう来てたかつてのが正しいか。」薰の目線の先にいたのは

「あら、そつちこそ遅かつたのね」やちよだつた。

「しつかし相変わらず強いことだ」見てみろと薰が気絶している魔女を指さした。

「一撃で魔女が・・・氣絶してる・・・」

「すげえ・・・強い・・・」

「待ちくたびれて魔女と遊んじやつたからね」やちよが答える。

「そんな・・・いくら何でも早すぎる・・・」頭を抱えるももこに対し

「いや違う。俺たちが来るのが遅すぎると、だろ?」薰が言った。

「よくわかつたわね、それにこれくらいの力量差があるくらい、薰だけじゃなくとももこも気付いてるはずでしょ?」

「くつ・・・」「・・・・」やちよの指摘にももこといろはぐうの音も出なかつた。

「要するに最初から勝負はついていた、と言いたいのか?」

「そんな・・・薰さんまで」薰の推測にまだ諦めたくないような口調で当麻が言う。

「その通り、最初からあなたたちの負けは決まつてたわよ、だけど特別にもう一度チャンスをあげるわ」

「え、もう一度?・・・」やちよの意外な提案にいろはは驚く。

「ええ、あなた、魔女を一人で倒しなさい、そうすれば実力を認めてあげる。私の食べかけなのはちょっと残念だけどね」

「んな無茶な・・・」改めて出された提案に対して当麻はつぶやく。「馬鹿にするのも大概にしろ!人を弄んで!!」やちよの態度にしごれを切らしたももこが声を荒げた。

「落ちつけももこ」むしろチャンスじゃないか?それに、これは元々やちよといろはの問題であつて、俺たちが口を出す問題じやあない。」すかさず薰が宥める。

「そうよ、薰の言う通り、どうするかはこの子次第よ。」

「くつ、それはそうだけど・・・」薰とやちよの言葉にももこはぐうの音も出ない。

やちよは改めていろはの方向を向き、

「さあ、どうするの?」と問い合わせた。

「薰さん・・・」

「たぶん彼女はここまできて退くことはしないだろ。」当麻を薰が口を開いたとたん、

「それなら私は・・・今ここで魔女を倒して見せます」いろはは力強く答えた。

「そう、それなら見せてみなさい、神浜の魔女を倒すところを」
「頑張れよ、いろはちゃん」

「環さん、頑張つてください！」

「まーお手並み拝見つてことで」

三人がそれぞれエールを送ると、

「さあ、魔女が動くわよ……」やちよが氣絶させた魔女を見ていつた。
「ズシャアアアアア▲◇○●◇——!!」

「うわ！動いた！！」再び雄叫びを上げて動きだした魔女を見て当麻が声を上げた

「下がれ！ここはいろはに任せよう！」「は、はい！」薰の言うまま当麻は引き下がった。

「あ、だれかキュウベえの事を！」

「え？あ、はい！」「ブギュー！」当麻さんは飛んできたキュウベえをしつかり両手で抱きかかえた

数分後

「効いてるんですか……あれ？」

「微量だが効いてるだろ」

「やれー！いろはちゃん！」

「……」

4人と1匹は魔女といろはの戦いを見守っていた。

当のいろはは

「それっ！」腕についているクロスボウを武器に戦っていた。

(効いてるけどこのままじゃ……)

「ジャギギ▲◇○○◇▼☆ー!!」

「おつと！」

襲い掛かる魔女の攻撃をどうにかローリングでかわす。

(普通に連射しても効かないのなら……)

いろははクロスボウを上に構えた。

「あ、クロスボウを上に構えた？」

「なるほど……そう言う事か」

「薰さんあの構えって？」ももこの疑問に薰は「見ればわかるつて」と答えた。

「いつけーーーーー！」一か八かいろはありつたけの魔力の矢を連射した

それはまるで雨のようだ

「そうか！これなら一気に魔女にダメージを与えることができるのか！」

「きれいだ・・・」

「ワンドフル・・・こいつは中々見どころがある」

「モキュ！」

そしてその矢の雨を浴びた砂場の魔女は

「ズシャ・・・ズシャ・・・」

と倒れた。

そして結界が晴れ、元の街の景色に戻った。

「や、やつた！」

「エクセレンン！」

「やつた、いろはちゃん！」

それぞれがいろはをたたえる中ももこは

「どうだ！やちよさん！」と我が物顔で言つた

「いやももこさんが得意げにならなくとも・・・」

「さすがに実力は認めるわよ。ま、最初から大丈夫だろうとは思つていたからね。」

「だろうな、やちよは昔から優しいから。流石に簡単に追い出す真似はしまいと思つたよ。」

「え？そ、そうなんですか？」やちよの意外な発言と薰の返答にいろはは驚きを隠せない。

「ええ、何となくだけどその人を見ればわかるわ」やちよが答える。

「あーだからあの時魔女を譲つたりしたんですか」

「やつぱやちよ、最初から退く気が無いのは分かつてたじやんよ

「いや人を弄んだだけだ・・・」ももこは睨むように言つた。

「十咎さん・・・」

「別に弄んでなんかいないわよ、目的のために導線を引いただけ」「導線・・・？」

はてなマークを浮かべたいろはに

「探してたのはコイツだろ？」 薫が当麻が抱きかかえている小さいキユウベえを指差した。

「私の前に、このキユウベえは現れてくれないから……」「え……？」「そうなんですか？」 当麻といろはが聞き返す。

「それにだ、ある時急にキユウベえが全く神浜に現れなくなつてな。そこで同じタイミングで現れたのがコイツ小さいキユウベえつて訳、情報屋に教えてもらつたときは半信半疑だつたからまさか実在してたとはね。」 薫が言う。

「……だけどこんなイレギュラー、どう考へても危険な因子にしか思えないのよ。」 やちよが続く。

「つてことは……」 と当麻がつぶやくのと、

「当麻ーツ！」 ももこが叫ぶのと

「はつ……真山さん！」 といろはが叫ぶのと、

ジャキッとやちよが武器を構えるのはほぼ同時だった。

「だから、私も一般人に危害を加えたくないのよ。だからすぐにそれをこつちに引き渡しなさい。」 当麻に武器の槍を突き付けながらやちよが言つた。

「え、え……」 当麻は自分が置かれている状況を飲み込めず一瞬固まつた。

やがてごめんね。と小声で言つたかと思うと「……十咎さんパス！」

「モキユ!?」 キユウベえをももこに向かつて投げた！

「な!?」

「え!?」

「おおう」

宙を舞うキユウベえみて他の3人が驚く中

「ええ!?んな急に言われても！」 ももこは困惑しつつもガシツとキユウベえを受け止めた。

しかしやちよは即座に体勢を立て直し素早く槍を構えた！

「あーももこさん！」

「「しまつた！」」当麻とももこが声をそろえてあげたが

「遅い！」

すでに攻撃態勢に入つたやちよにキュウベえ共々攻撃された。

「ぐつ！」「ブギュツ！」

「キュウベえ！」「十咎さん！」すかさずいろはと当麻が声をかける
「ようやく消せるわ」

「やちよ、本当にコイツを殺るつもりか？」薰はやちよに尋ねた。

「ええ。」

これは何をしても無駄か、と薰は引き下がった。

そしていよいよやちよがキュウベえにどどめを刺そうとした時、
「やめてえーーーーー！」

いろはが小さいキュウベえを庇うように叫んだ、そして傷ついて
吹っ飛ばされていたキュウベえを抱き上げた。

「無茶すんな」薰が

「あなたもわからず屋ね、」武器を向けたままやちよがそれぞれ言う。
「この子が何をしたって言うんですか！」 いろはが庇う。

「そうですよ！まだ何も悪いことしてないじゃないですか！」 当麻も
ともに庇う。

「これからするかもしれない。」

「・・・確かにそうかもせんが！」 当麻はやちよの反論に何とか
返そうとするが

「リスクは早めに排除するものよ。」

「そんなことしたら聞けなくなっちゃう！あの子は・・・あの子は・・・
私にとつて、大切な子かのしれないのに！」 いろはは叫んだ。

「やちよ、こいつを殺すのを少し待つてやつたらどうだ？こんなに必
死だ。」 そんないろはを見た薰はやちよに対し言つた。

「嫌よ、そのキュウベえに関わるとろくなことにならない。だから、今
ここで消さないと」

「やっぱ退く気はないのか、残念。」やちよの答えに薰は残念そうに下
がる。

そこからいろははキュウベえをやちよの攻撃から庇い始めた。

「……」まで耐えたのは褒めてあげるわ。」数分後、やちよの視線の先にはやちよの攻撃からキュウベえを庇い続けボロボロになつたいろはがいた。

「薰さん止めてください！もう見てられません！」見ていた当麻は懇願する。

「さすがに魔法少女相手に戦えと？」

「じゃ十咎さん！！」

「行きたい気持ちは山々だけど……」

2人はそれぞれNOを出す。

「だけど……ここまでよ！」改めてやちよは攻撃の体勢を取る。

「ダメえ!!」「キュ!!」

止めるいろはとキュウベえの叫びに対しやちよが

「そいつを離しなさい、貴方まで串刺しになるわよ」と最後の忠告をした。

「いやです！絶対に離しません！」しかしいろは一步も引かない……
すると、

（急に意識が……）

そう思つたのを最後にいろはは小さいキュウベえを抱えたままその場に倒れた。

「いろはちゃん！」「環さん！」ももこと当麻がたまらず叫ぶ。

「わあお」薰が言つた。

「はあ……だから言つたでしょ……貴方の自己責任よ。」ため息をしながらやちよが言う。

「で、これからどうする？」のまま放置するわけにもいかないだろ？」
薰が聞いた。

「どうすると言われても……あ！調整屋に運ぶのは！」当麻が言つた
「なるほど！その手があつたか！」ももこがポンと手を叩いて言つた。
「やちよ。どうする？」

「仕方ない、私も手伝うわ。だけど、」

「だけど？」

「運んだら私は帰るわよ。」

「まー運んでくれるだけありがたい」

倒れたいろはを調整屋に運び込み、寝台にそつと寝かせてやちよと別れる。

「ふーん、そんなことがあつたのか、薰さんお疲れー」

「とはいってもまだまだ謎は多いけどな、」

薰は事の顛末を直樹に話しながら直樹とオセロに勤しんでいた。

「あの、何のんきにオセロやつてるんですか?」「キュ?」小さいキュウベえを抱えた当麻と

「そうだよ、薰さんも情報屋もいろはちゃんに万が一の事があつたらどうするのさ?」その横に座っているももこが口々に言つたが

「45対19で俺の勝ち。これでボドゲ勝負は俺の通算182勝181敗3引き分けだ。」

「ありやりや勝ち越されちゃつたか」2人には上の空だつた。

「薰さん聞いてる!」ももこは叫んだ

「あーまあ大丈夫だろ」薰は適当に返したその時だつた

「ハツ!」調整屋の寝台に寝かされていたいろはが目を覚ました。

「みんなあ、いろはちゃんが目を覚ましたわよつ!」いろはを見ていたみたまの呼びかけに

「いろはちゃん、大丈夫!?

「環さんが無事でよかつた・・・」

「おーやつと日を覚ましたか」

「ホントだ」

4人はそれぞれ言葉をかけた。

「皆さん・・・」いろはは涙目になつていた。

「ど、どうして泣いているんですか?」当麻の質問にいろはは「私・・・思い出しました・・・どうして魔法少女になつたのか・・・」と答えた

「え・・・」「思い出せたのか。」ももこと薰が言う。

「私・・・妹のために・・・」いろはは続ける。

「妹？」ももこがは聞く。

「あの子の病気を治すために魔法少女になつたんです……！どうして忘れていたんだろ……こんな大切な事……」

「忘れてた、というと？」今度は薫が聞く。

「はい、ずっと一緒にでした……」

「ずっと？」

「この間まで同じ屋根の下で、一緒に寝て、ご飯も食べてました。でもみんな消えてるんです……なかつたことになつてるんですけど……あの子がこの世界にいたことが……」

「そんな事つて……」ももこはつぶやく。

「でも実際にそうなんです！家に帰つてもういが居ないのが普通になつて……お父さんとお母さんと3人でいつも通りに暮らしてい

た」

「ばんなそかな……」

「私だつてさつきまで自分の事一人つ子だつて……」いろはは当麻に言つた。

「にわかには信じがたい話だねえ、薫さんは？」直樹が薫に聞くと「妹の病気を治すために魔法少女になつたはずなのに当の妹が行方不明、それどころかいろは本人もそれを忘れていた……エクセレント。盛り上がりってきたじやないか！」半ば興奮気味に薫は言つた。

「要するに私が妹さんとあつていたとしても忘れているかもつてことお？」

「おそらくそうだ。」みたまの問いかけに薫が答える。

「じゃあ、魔女の仕業かしらあ？」

「長いこと魔女と戦つているけど、そんな魔女がいるとは……」

「いや、僕の聞いた話ではそんな魔女はいないね」それに対し直樹が否定した。

「じやどうして……」当麻は首を傾げた。

「私が思い出せていないことが他に何かあるのかも……」そう言つた

いろははは当麻の抱えるキュウベえに触れた。

が、「モキユ」「……もう、あなたに触つても何も思い出せないね

いろは言つた。

「でも、あなたがういの事を思い出させてくれたんだよね？」 小さいキュウベえにいろはそつと言う。

「モキユ？」 はてなマークをキュウベえは浮かべていたが、「きつとそう、そななんだよ・・・そな気がする。」 いろはは微笑んだ。

やがて涙をぬぐうと

「うん・・・決めた・・・」

「環さん？」

「私、また来ます・・・」

「まさか神浜に、ですか？」

「目的は果たしたはずだろ？」 当麻とももこが聞く。

「そうです、今度はういを探さないといけませんから・・・それに、」

「それに？」

「きつとこの神浜市のどこかに手掛けりががする気がするんです。ういが消えちやつた理由も、あの子が今どこにいるかも」

「すべてを思い出させてくれた小さいキュウベえがいる町だから・・・」

「・・・その記憶が何者かによつて植え付けられた偽物である可能性は？」 薫が口をはさむ。

「それでも私、この記憶を信じます。今の私は・・・環ういつて妹がいる環いろはつて思えるから」 すつかり明るい顔になつたいろはは自信高く返した。

「記憶を信じて、妹を探すのか・・・その覚悟、おれは気に入つた。」 薫は微笑んだ。

「アタシは大歓迎だよ、新しい仲間が増えるからね」

「私もお客様が増えるし無理に止められないわあ。」

「みたまと同じく僕も新規の客はありがたいからね、歓迎するよ。」

「二人ともなあ・・・」 ももこはあきれるが

「うつふふ」 「ウケケケ」 直樹とみたまは笑つた

「じゃ当麻、次来るまでチビスケを当麻に預けるけどいい?」ももこは当麻に聞いた

「うーん預けるつて言つても親に何て言えば……つてかそもそもキュウベえつてどうすれば……」当麻は難色を示したので、

「んーじゃあ、アタシが預かるよ、どうもこの町から出たがらないみたいだからさ、」

「あ、じゃあよろしくお願ひします!」「モキュー!」当麻は今度は元気でな、とそつとキュウベえを床に置き、ももこの元へ向かわせた。

「ありがとうございます!」

「ところでさ、いろはちゃんがつけ? そろそろこの子に名前をプレゼントしない? いつまでも小さいキュウベえ呼びじや不便だろ?」直樹が言つた。

「略してちいべえは?」

「チビスケじゃダメなのか?」

「フーミン、あるいはげろしやぶ」

「いまいろはちゃんに聞いてるのから、部外者はお静かに」みたまが3人に話す

「でも、私が……いいんですか?」

「いいんだ、アンタの大切な存在だろ?」薰が答える。

「さつきげろしやぶつてつけようとした人が何言つてんだ」直樹が突つ込んだ

「それじゃあ、えつとキュウベえちゃん……」

「却下。もう少しいい名前はない?」いろはに直樹があつけなく言う
「え……それなら……あ! モキューはどうですか?」いろはは何とかひねり出す。

「それいいねえ!」「可愛いですね」「いいんじゃない?」「シンプルだ」4人がそれぞれ言う。

「じゃあモキュー、これから一緒にういを探してくれる?」

「モキユキュー!」いろはの問い合わせにモキューは元気よく返した。

神浜アンノウンストーリーズ

乙の章 絶交ルールの謎 絶交ルールの謎 その1

いろはが妹のういを探す決心をした次の日の神浜大学の昼休み。学食のテーブルでやちよが食事を始めようとすると、

「よう、」薰が声をかけてきた。

「何の用かしら薰。」

「いやあ昨日の報告を一応しておこうと思つてね。あのあと帰つちやつただろ?」

「用事はそれだけ?」

「あとうわさについての情報交換でもする?」

「・・・それもいいわね。」

「つてことが一連の出来事。彼女、環いろはには大げさだがこの世界から消えた、あるいは消された妹がいたんだ。」昨日のことを話しながら薰はかけそばをすすつた。

「環さんに偽の記憶が埋め込まれてる可能性は?」

「いや、その線はおおいにあるが今は消している。彼女の気持ちを否定するのもどうかと思うからね」

「あるいは大げさだけど世界が改変された可能性は?」

「そんなことを魔法少女の力をもつてして可能か? ましてやキュウベえでも流石にそこまでの大仕事ができるか?」

「さて、どうでしようね。」

と話し合っているところに

「え?!ええ?」大柄めの男性が驚いた様子で見てきた。

「あ、宮沢教授」気づいた薰が声をかけた。

「ここにちは、宮沢教授。」やちよも挨拶をした

「え? 何? 神浜大一の変人と? 神浜大一の美人が? こんなところで? もしかして付き合つてる?」宮沢教授と呼ばれた男性は驚いた様子で

聞くが、

「いや、单なる世間話です。」薰がいう

「ホントに？」

「ホントです。」今度はやちよが言う。

「まあ、あんまこういうのにオジさんが首を突っ込むのもねえあれだ
し……」宮沢教授はその場を離れた。

「ま、彼女はまた神浜に来るよ。妹がいようがいまいが関係なく。」「
そう……」

「どうした？みふゆの事か？俺も心配だが……」すこし暗い顔をした
やちよに薫が尋ねた。

「……」

「……じゃ、話は変わるけどあのキュウベえの事はもういいのか？」
やちよの心中を察したのか薫は話題を変える。

「もういいわよ。だってあの子は環さんにとつて大切な子でしょ。」や
ちよは優しいほほえみで答える。

「それなら安心だ。」薫は言つた。

「でも、何か悪さをしたなら狩る必要はあるけど、」
「じゃ、認めてるつてこと？」

「一部はね、」

「ところで薫、絶交ルールについて何かつかめたかしら？」

「あーそれなら、ほら、さつき話した真山当麻ってやつが居ただろ、彼
から有力な手掛けりをつかめてねえ」

「どんなの？」

「どうも数日前からも学校に来てない奴がいるって言つててねえ。そ
れも数人。」

「薫は絶交ルールの仕業つて考えてるのかしら？」

「もちろん。やちよは？」

「私もよ。」

「じゃ放課後の予定は？」

「今日は開いてるわ。」

「じゃ聞き込み調査でもする？」薫はやちよに聞いた。
「たまにはそれもいいわね」やちよはうなずいた。

ところ変わつて神浜大学付属学校。当麻は昨日の出来事を振り返りながらため息をついた。

「あれマジで夢じやないのか……」購買で買ったパンを袋ごと机に置きながらつぶやく。昨日、あの後ももこが連絡先を交換した。そして成り行きでいろは、直樹、みたま、そして薫とも連絡先を交換した。次の朝、トークアプリの画面を見てやつぱり夢じやないと何度も確認した。確実にとんでもないことに巻き込まれた、そう思うと、ももこからメッセージが来た。

『当麻、時間があるなら相談に乗ってくれない?』

『いいんですけどどこで?』

『外の庭園のベンチだけどいい?』

当麻はOKのスタンプを送ると庭園に歩く。
庭園に付くとベンチでももこが手を振つていた。

「あ、十咎さん!」

「当麻——！こつちこつち！」

ももこの隣に座わるとさつそく当麻は

「相談つて……また水波さんとあの秋野さんの事ですか？」

「お察しの通りだよ、あとそれにアタシの事はももこでいいよ」

「じゃ、ももこさんやつぱり秋野さんと水波さんがケンカしてるんですけど?」

「そう。もう絶交寸前。」

「絶交……」まさかと思い当麻は

「あの、ももこさんもしかして絶交ルールつて知つてます?」

「え？……ああ！あれかー、薫さんが追つてるていう？」

「もしかしてももこさんも薫さんに聞かれたんですか？」

「ああ、でもそんなに詳しいことはわからないって言つたよ。でなんかあつたら連絡してくれ薫さんに言われたつきり。」

「はあ、での2人に何かあつたんですか？」当麻は話を戻そうとする。

「そうそう、その話がしたいんだよ、かえでとレナの奴がさ、またケンカしちやつて……」

「またつてことは何回もケンカしてるつてことですか？」

「そう、何回も。」

「じゃなんで俺に相談するんですか？みたまさんとかやちよさんとか
もつといい人がいるはずなのに。」

「やちよさんはその・・・」当麻の質問にバツが悪そうな反応をすると
ブルブルブル

当麻のスマホから着信音が鳴った。

「あ、すいません。・・・ 薫さんからだ。」

「薰さんが・・・？あ、ああ出ていいよ。」

じやすいませんと当麻は電話に出る。

「もしもし？あの薫さん？どうして電話を？」

「ああ当麻。ちょっと手伝つてほしいことがありますね。」

「なんですか？」

「絶交ルールの調査、あと少しで謎に近づけそうなんだ。もう少し聞き込み調査をすればたどりつけるかもだがなおとといも話した通り、やちよと俺だけじや怪しまれる。」

「はあ・・・そんな事昨日も言つてましたけど、ももこさんとかに協力してもらえば・・・」

「・・・当麻、昨日のあのギスギスした空気を忘れたのか？」

「確かにももこさんは妙にやちよさんに対するあたりが強かつた気がしますが」

「だからだ、俺の助手（仮）にならないか？」

「（仮）つてなんですか・・・まあ暇ですしいですよ・・・」

「じゃ放課後、学校前のバス停で。」

「はい！」

その後、当麻はももこにチャイムが鳴る寸前までレナとかえでの仲に関する愚痴を聞かされた。

「そいじや、当麻！何か困つたらまた連絡するよー」

「そういい当麻はももこと別れた。」

神浜アンノウンストーリーズ

story5. 乙の章 絶交ルールの謎 その1

その日の夕方、

「はあー疲れた・・・」と当麻、

「真山君も疲れてるし、薰、そろそろ休憩にしましょ?」やちよの問い合わせに

「情報も整理したいし、この近くのドーナツ屋にでも行くかい?」薰が答えると

「ほんと・・・よく絶交だつて言つてたはず・・・」誰かのつぶやく声が聞こえた

「絶交?」

「だれか絶交つて言つたわね・・・」

「あつちの方からだ、やちよ、どうする?」

「もちろん行くわよ」

3人は声のした方へ向かう。

「おいおい今、アンタ絶交つて・・・おや?」

「あら、」

「あの人つて確か・・・」

3人が向かつた先にいたのは

「え?え?」

3人を見て困惑するいろはだつた。

絶交ルールの謎 その2

「確か……やちよさんに真山さんに薫さんでしたつけ」突然現れた3人を目の前いろはが言う。

「ご名答。覚えていたねえ偉い偉い」薫が返す。

「そんな、……あんなに狙われたら流石に覚えてますよ、お二人は付いてきてくれましたし……」

「ま、まあ成り行きですけど、」

「とりあえずやちよに警戒するのはやめてくれ、そいつの事情についてはやちよに話してある。」やちよに対して警戒している表情をするいろはに薫が言う。

「そう、私たちは忠告しに来たのよ。」

「忠告……ですか？」

「まあ、そういうところ。」

「この町の中では絶対に、絶交なんて言つちやだめよ、」

「へ？」

「特に誰かに仲違いした時に言つてみなさい、たちまち絶交ルールの噂に囚われてしまうから……」

「何言つてるんですかこの人？」いろはではなく当麻が小声で薫に聞いた。

「忠告だよ。」

「でも、噂に囚われてるつて……」いろはも尋ねた。

「仕方ないなあ、こんな話が最近流行つててね……」

『アラもう聞いた？誰から聞いた？絶交ルールのその噂

フンだ！キライだ！ゼッコウだ！つて言つたら見えないけどそこにある！

もしも仲直りしようとすると、連れて行かれてサータイヘン！

友達を落とした黒い少女に捕まるとき、無限の階段掃除をさせられちゃうつて、

神浜市の少女の間ではもつぱらのウワサ

ヒーコワイ！』

「と、いうのが絶交ルールの噂さ。」

薰は絶交ルールの噂の語り口を語った。

「今のがそのうわさですか？」

「絶交と言えば最後、何があつても謝罪の言葉を口にしてはダメ。」「ほんでやつぱ謝りたいと謝つた瞬間たちまちバケモノに囚われちゃうのさ。……と言われるけどねえ」

「そんな突拍子の無い話を言われても……」

「信じておきなさい。今のところ”神浜うわさファイル”では非常に信憑性の高い噂だから。」

「何ですかその”神浜うわさファイル”つて」

「……神浜にあふれているうわさをやちよが纏めたものさ。どうもここ最近その噂たちがこそつて怪異や都市伝説のように現実になつてるらしく、大変だ」

「そして現実になつたうわさ次第では行方不明者だつて出てる……」

「ばんなそかな」

「そんな事つて……」当麻といろはは返した。

「残念ながらホントだぜ。なんならそのキュウベえと同じぐらいの謎だ、」

「えっ!? ……ところで、やちよさんはまだモキュを狙つているんですか？」

「やつぱりまだ諦めて無いんですか？」

「だつてさやちよ、結局コイツの処遇はどうするの?」3人の問い合わせ

「環さん、あなたの回答次第よ。悪さをしてなければ狩る必要もないでしようし」

「悪いことなんて起きてません……あつたとしても、妹の事を思い出しあただけで……」

「薰の言う通り……でも、そんな身近な人を忘れてたの?」

「……はい、ただ、お父さんもお母さんも妹のことは憶えて無いし、あの子の物も何も残つてないから……」

「要は証明のしようが無いと?」薰が聞く。

「・・・そうです！」

「でもやつぱりそんな身近な人を忘れていたのは絶対おかしいですよ・・・偽物の記憶だつたとかは？」怪訝に思った当麻はいろいろはに聞いた。

「・・・それは分かりません、でも、あの子を思う度に温かい気持ちになるから・・・」

「なるから・・・？」

「だから私は思い出したこと信じてますし、妹を探したいと思つてます。」

「・・・つまり悪いことは起こつてないと？」

「はい！不思議なことは起こつても悪いことは起こつてません！」い

ろはは言い切つた。

「ならよかつたわ。・・・私から言う事は無いわね・・・」

「一応右に同じくつてことで。」

「それに、分からなくはないしね・・・環さん、あなたの気持ちも・・・」

「え？」

「ど、どういうことですか？」やちよの意外な発言に当麻といろはは首をかしげると、やちよは改まつた様子で

「・・・気にならないで、それじやあ2人とも、行くわよ。」

「おう」「え、あ、はい！」

「うわさに気を付けなさい、とにかく忠告はしたわよ、」

そして3人はその場を立ち去つた。

そのあと近くのカフェで情報をまとめたべくお茶をしたが、当麻はさつきやちよがいろはに向けていつた、『分からなくはないしね・・・環さん、あなたの気持ちも・・・』という言葉の意味が気になつて仕方がなかつた。

聞こうにも、直後の態度を見る限りやちよは答えてくれそうにない。そういう考へていてるうちに

「ねえ、今日はここで解散つてことにしないかしら？」やちよが言った。

「ああ、まあこんな時間だし、今日はこちらで打ち止めでもいいだろ

う。当麻は?」

「…あ、はい!俺も今日はここまでいいと思います。」当麻はハツとなり、つい答えてしまった。

「じゃあ、決まりね」

会計を済まし、3人はそれぞれ店をあとにした

「じゃ、また明日ー、何かあつたら連絡する」

「ええ、分かつたわ。」

「当麻もよろしくー」

その日の帰り道

「…当麻、帰り道の方向が同じなのかな?」薰と当麻はともに帰路についていた。

「いや…どうしても聞きたいことがあって」「嫌だ」

「即答ですか?」

「どうせやちよの事だろ?」

「そうですけど…・・・薰さんなら何か知ってるかもって」

「まあ知つちゃあいるが答えたくない。それだけ。」

当麻はそこを何とか、と言おうといしたが、薰の様子をみても、答えてくなさそうだと感じた。

そして会話のないまま公園の前を通りかかると、何かを言い争っている声がした。

「薰さん、あれって」

「おお、ももこ達じやあないか」

「しかもまたもめますよ」

「どうする?仲裁しに行くか?」

「え?」「じゃ仲裁しに行つてみるか」少し困惑する当麻を放棄し薰は公園に向かつた

「ちよつと!流石に女子同士のけんかに割り込むのは…・・・」

さすがに異性の喧嘩に入るのはまずいと考えた当麻も追つた。

「だーから、落ち着けよ、いつたい何で喧嘩してんのさ」言い争うレナとかえでをなだめるているももこの後ろに

「よう」「十咎さんどうしたんですか?」当麻と薫があらわれた
「薫さん、当麻、この2人に何か言つてくれない?全くアタシの口を聞いてくれないんだ。」

「ふーん」「それだとなおさら無理な気が・・・」

「とにかく頼むよ」

「仕方ない、ROSSのカフェオレ3本で手を打とう。」

「え?引き受けるんですか?」

「悪いか?」

「いや別に」

「つてことで」薫はバツとコートを揺らすとレナとかえでの元へ行く。
「やあ何をもめてるんだい?」

「そんなの薫さんには関係ないでしょ」レナが言つた。

「そうだよ薫さんは黙つて!」便乗するようにかえでも声を上げた。
「ほら言わんこつちやないですよ」当麻はそんな3人を見てももこに耳打ちをした。

「ROSSのカフェオレ、あとでレナとかえでにも1本づつ買わせる
か」ももこも当麻に耳打ちをして言う。そこに

「あれ、ももこさん真山さん?」いろはが現れた。

「関係ないとは限らない、とりあえず何でもめてるか教えろつて」それ
でも薫は同じ質問を投げかけた。

「だから薫さんには分がらないわよ!」

「だから薫さんは黙つて!」レナとかえで、薫は互いに一步も引かない
状態だつた。

「おいおい年上になんて口の利き方をするんだ?俺はいいが他だつたら
なんていう?」

「う、う、うるさい!もうかえでとは絶交なんだから!」

「あー言つた!そう言うならレナちゃんとは絶交だもん!」

薫がくるつとももこと当麻の方向を向き、一言

「失敗した」

「やっぱ薫さんに頼むんじゃなかつた」ももこがやつぱり、という顔を
する当麻を差し置き言つた。

「そういうことは軽々しく口にすんな、ってか、これで何回目の絶交だよ？」

「そうだ、だから何があつたか教えてくれ」 ももこに続くように薫もいつたが

「…………」 レナは一瞬黙り込んだと思うと

「いちいち首突つ込むなこの過保護お節介野郎と面白がりボサボサ野郎！」 声を荒げダつと逃げ出した！

「な、お、おい！ レナ！」

「地味に傷ついたぞ」

「ちよつと水波さん逃げないで!!」 当麻はレナを追い駆け出した！

「な!!」 足の速い当麻はレナとの距離をどんどん縮めている、そこに、「わあ……」と小声でつぶやくいろはの姿を見た当麻は「あ！ 環さん！ ちようどよかつた！ 水波さんをつかまえて！」と叫んだ。

「え？ え？ ……止まつてえー！」 わけもわからないままいろはは変身し叫ぶ。

「アンタ……くつ！」 このままだとレナは挟み撃ちになってしまった。ならばと「アンタ、真山の知り合いか何か知らないけど、容赦はしないからね！」 カツとレナが光に包まれたと思えば彼女も魔法少女姿に変身した。

「わわっ！ 変身した！」 一瞬当麻は立ち止まつてしまつた。

「ここまでくればその射程も形無しね！」 レナはいろはに接近し言い放つた。しかし一瞬ひるんだとはいえたが、当麻はまだ追つてくる。「ならばこれでもくらえ！」

「な!?」「なに!?」

再びレナが光に包まれたと思うと

そこにはいろはの姿があつた。

「え？ 私！」

「た、環さんが2人!?」 当麻といろははまたひるむ

「スキあり！」 いろはに変身したレナは通せんぼしたいろはを軽く吹つ飛ばす。

「キャッ！」 「環さん！」

「フンッ、事情も知らない奴が纏めて首突っ込んでじゃないわよ！」

レナはそういって当麻たちの方を向くと

「バーカ！」

そう言い放つて走り去つていった。

「あつ水波さん！」

「うーん逃げられたか」

「つてかあんなに絶交つて言つたらまずいのでは？」ふと当麻がつぶやいた。

絶交ルールの謎 その3

レナに逃げられた後、薰・当麻・いろは・ももこ・かえでは近くにあつたカフェにいた。

「当麻もいろはちゃんもこれ、アタシのおごりでいいから。」「えつ。いいんですか?」「あつ、そんな私……」

「アタシらの喧嘩に巻き込んでやつたし。」

「え? でも薰さんは?」

「えーとあの人は……さつき缶のカフェオレおごるつて言つちやつたからいいかなつて。」そんな薰は4人の話に目をくれず当麻の隣でパフェを食べて いた。

「それに前に助けてくれたお礼もまだしてないし、」かえでが言つた。

「え? 2人は前にあつたことがあるんですか?」

「そう、挨拶はまだだけどね。」どうやらかえでといろはは面識があるようだつた。

2人が自己紹介をしている横で

「ももこさん、」

「どうした?」

「結局のところ水波さんと秋野さんの喧嘩の原因つて?」ふと当麻がももこに聞いた。

「それがさ、聞こうとしてもだんまりなんだよ。」

「え?」

「まあレナとかえでの喧嘩なんて日常茶飯事だし、またいていはレナが原因で頭が冷えたら2人とも反省するんだけどね。」

「あ、でもさつき絶交つて言つてましたけど大丈夫なんですか?」「大丈夫つて……」かえでがふと首をかしげる

「なんか絶交ルールつてのが流行つてて危ないつて聞きましたけど、」

「そうだよ、真山さんの言う通りですよ、」いろはも乗つた

「絶交ルール……それって薰さんから聞いた?」ももこの問い合わせにいろは

「はい、あとその時やちよさんもいました」と答えた。

「なんだあ・・・まあやちよさんも薫さんも単なる噂オタクだし、当麻もあの2人に付き合うのもほどほどにしなよ、それに第一、噂が実体化するなんて有り得ないんだから、」笑いながらももこは言つた。
「それはどうだろうね、」パフエを食べ終わつたのか顔を上げた薫が言い放つた。

「あ、薫さん、聞いてたの!?」

「こんな至近距離で聞こえない方がおかしい。俺達は趣味とはいえば氣で調査してるんだ。」

「でも本当に絶交ルールなんて存在するの？」ももこのさらなる問いに薫は一言、

「どうだろうね。」とだけ言い放つた。

「かつこつつけてますけど薫さん、口にクリームついてますよ」当麻が小声で隣にいた薫にそう言つた。

神浜アンノウンストーリーズ

乙の章 絶交ルールの謎 その3

翌日、ミレナ座にて

「薫さん、それは本当かい？レナとかえでの奴が絶交つて言いだしてたつて」パチン

「本当さ。このままももこたちを追えれば絶交ルールの噂の正体を確かめられそうな気がするけどいかんせんももこが頑なにうわさの存在を信じないからね」パチン

薫と直樹は将棋をしながら会話にふけつていた。

「まーやちよさんとの確執もあるし仕方ない気もするけど、薫さんはこれからどうするつもり？」パチン

「取り敢えず当麻に監視させる、本人が釣れなかつたらアンタに監視役の仲介でも頼むさ。」パチン

「あのね、僕の本懐は情報屋であつて仲介は本来みたまの仕事だからね、あ、王手」パチン

「あー積みだ、参りました。」

「これでボクの182勝182敗3引き分け。どうする？みたまも呼んで一旦お茶にでもするかい？」

そんな会話をしていると

「ここにちはー」「あらあ、いろはちゃん。」
いろはが訪ねてきた。

「「神浜市にはびこる噂?」」

「はい、皆さんなら何か知ってるかなと」いろははどうやら噂について聞くべくやつてきたらしい。

「例えば、調整屋さんには可愛い女の子割引があるとか?」

「調整屋ジョークは置いといて、そこはやっぱ僕やみたまよりこの薰さんの方が詳しいんじやない?」慣れたような口調でみたまのジョークをかわしつつ直樹が言つた。

「無視されるのはつらいわよお」

「ここ最近で神浜市に変な噂が広まつてるのは確かだ、でもだ、どうして違う街に住んでいるアンタがこの街の噂に興味を示すんだ?」みたまを無視し、薰はいろはに聞いた。

「あの、実は絶交ルールつて噂が気になつてて」

「ああそいつは有名な噂だね、なんならさつきまでその話をしたところだ。」

「有名・・・」

「もちろん情報屋や私も知つてるわよお」

「おそらくいろは、アンタはさしづめ昨日のあの件が気になつてここに聞きたくないか?」

「どうしてそれが!?つていきましたつけ。」

「もしかしてまたレナとかえでがケンカしたのかしら?」

「そうです・・つてまたつて?」

「レナとかえでのケンカはね、日常茶飯事なのよお

「よくある事なんですか?」

「そう、よくある事なの」

「で、アンタはその絶交ルールの話を思い出して俺に聞いてみようつてことになつたのか?」

「そうです、ももこさんにも話したんですけど信じてもらえないくて・・・」

「まあ、そりやそうだよね。」

「え？」直樹の意外なリアクションにいろはが思わず首をかしげる。

「どうしてなんですか？もしかしてそういう話が苦手とか？」

「それはだね、その噂をやちよさんが中心に騒いでるからだよ。ね、薰さん？」直樹が椅子に腰かけたまま薰に顔を向ける。

「勝手に巻き込むな。」

「ともかく、水と油つて言うか火に油というかS極同士、とにかく引き合わないのさ。」

「つまり、発信元が原因つてことですか？」

「そうだよ、まあ昔はあんな険悪ムードじやなかつたんだけど。でも今じゃももこも悪態だらけさ。」

「やちよさんは変になつた　あいつは自己中になつた　モデルの仕事をする奴なんて鼻に付くだけで気に入らない・・・とにかく言い出しだらキリがないわよお」

「ま、昔から仲が良かつた分ひがみもその倍つてことじゃない？」直樹がそう言い終えると

「あれ、みんな揃つてなにしてんだ？」「薰さん、呼ばれたんで来ましたけど、つて環さん？」今度は当麻とももこがやつてきた。

「そのケンカの事なんだけど、おかしなことがあつて、」昨日勃発したケンカについて話してたと、直樹が説明するととももこはこう口を開いた。

「ももこのおつさん臭い所？」

「絶対違うでしょ」みたまのあからさまなボケに直樹が冷静に返すと「レナとかえでのケンカの事だよ!!」

「え？まだ仲直りして無かつたのか？」薰が尋ねた。

「そうですよ、2人とも反省して仲直りするんじやないんですか？」いろいろはも続くと

「それが薰さんに呼ばれてここに向かう途中ももこさんがレナが謝りに現れないとかどうとか言つてて・・・」

「そなんだよ、当麻にはもう話したんだけど、一向にレナが謝りに現

れない。それどころかアタシらを避けてる。」

「マジか？」

「マジ、しかも、かえでも意地になつて最近一人なんだよな、」

「それ大丈夫なのかい？今まで聞いた中じや一番深刻な気がするけど。」直樹が聞くと

「大丈夫かつて聞かれたらそうじやないけど、もちろん仲直りして欲しいよ」

「じゃあ、俺たちでその仲直りを手伝う事つてできませんか？」

「あら、それなら私達も手伝っちゃうわよお？」

「当麻はいいけど、調整屋も情報屋も薫さんもどうせ報酬が居るだろ？」

？

「ない方がおかしいわよ」「仲直りは専門外だし高くつくよ」「ほらな、それに、調整屋も情報屋も傷つけたくないし。」

「は、はあ・・・薫さんはどうなんですか？」

「まあやらんこともない。」

「・・・あのいいですか？、もしかしてレナちゃんは絶交ルールのこと」

「ないない、当麻の奴にも言われたけどうちのチームに限つてそれはないつて」

「じゃただ単に互いに頑固になつてるだけつて言いたいのか？」

「なら私もその力になりたいです。」

「いやその心遣いはありがたいけどさ、もう少し様子を見てみるよ。」

そう言い張るももこを尻目に当麻が小声で「大丈夫かなあ」とつぶやいた。

to be continued . . .

絶交ルールの謎 その4

ももこがレナとかえでについてもう少し様子を見ると言ひ出して数日が経つた

「で、薰さん、ももこは大丈夫なのかい？」

「俺に聞くなよ。当麻、あの三人について何か変わった様子はあつたか？」

「うーんレナとかえでは相変わらず避けあつてる感じでしたし、ももこさんはたんだんイライラしますよ、あ姫だ」

薰たち三人は坊主めくりをしながらももこ達の動向について話し合つていた。

「じゃあももこさんは大丈夫じゃないんじやあ・・・」

その横で坊主めくりに参加はしてないものの耳を傾けてはいたいろはが口を挟むと。

「あーーーーーーーー!!」

そんな叫び声と共にももこがずかずかと入ってきた。

「あらあら」「ああやつぱり」

「なーんでアタシがこんなに我慢しなきやいけないんだ!!」

「どうしたんですかももこさん」起こつた様子のももこに対し当麻が尋ねる

「もう辛抱ならん!こうなつたら介入してやる!」

「そんなしばらく様子を見るつて・・・」

「過保護とでも何とでも言え!」

「誰も言つてませんつて!とにかく落ち着いてください!」当麻はももこをひたすら宥めようとするが

「いいや落ち着いてられるか!アタシがアイツら二人の面を突き合わせてやる!!」

「いやいや強引に合わせたら逆効果ですって!」

「いいや行くからな!」ももこは一向に聞く耳を持たない。

「なんとなく予感がしたけど結局こうなつたか。」薰が言い合う2人を尻目に言う。

「ももこさんまで暴走したらどうなっちゃうんですか？」

「ま、ボクが思うに口クな事にはならないよ。」いろはの質問に直樹が答える。

その答えにいろはは少し考え込むと、

「あの、皆さん」と口を開いた。

「なあに？」「何だい？」「何だ？」

「何かあつたら教えて貰つてもいいですか？私、今日もういの事調べるので、」

「いいわよ」「あいよ」「分かつた。」

そう言ういろいろは調整屋を出た。

「はあ、ももこさんも出ていつちやいましたよ」ももこと言い合い少し疲れた様子の当麻がため息交じりに言つた。

「当麻くんは止めたのお？」

「止めましたけど」

「まあももこは頑固だからしようがないわよお」みたまは当麻に同情のまなざしを向けた。

「薰さんつてゲーセン行くんですね」

当麻は薰に誘われゲームセンターにいた。

「まあね。」薰はそう言いながらダンスゲームに興じていた。コートと肩掛けカバンは当麻に預けていた。

タタタタタと高速ステップを薰が踏んでいた傍らで

「ん？」当麻はその何かに視線を感じた。

その視線の先では

「まさか店内ランクの1位が薰さんだったなんて、それにどうして真山も・・・」そうつぶやいていた人影があつた。

「あれは水波さん・・・？」

「ちょっと薰さん、」

「なんだ人がハイスクアを出した後に」

「誰かがこつちを見ていたような気が」踊り終わつた薰に当麻は声をかけた。

「やつぱりね、おそらくその誰かさんはレナだよ、」

「え？」

「前にももこがここはレナの行きつけだつて言つてたんだ。俺もここが行きつけだけど」

「で、追うのかい？」コートを着ながら薰は聞く。

「うーん、絶対口きいてくれなさそうですし……」

「じゃ、今日は解散にする？」

「解散で。」

（今の水波さんが謝る気配はなさそうだし、もし謝ったとしても絶交ルールが本当だつたら……でも2人があのままなのもちよつとな、）帰路に付いた当麻はそんなことを考えた。

神浜アンノウンストーリーズ

乙の章 絶交ルールの謎 その4

翌日、ミレナ座にやつてきた当麻は
「ということで手伝わせてください！」そういうはがももこに頼み込む瞬間を目撃した。

「確かに妹たち3人に似ているとか何よりかえでの事を心配くれてるからなあ……よし！この際いつちよ手伝つてもらうか！お、当麻、ちようどいい所に！」

「どうしたんですかももこさん？」

「実はいろはちゃんが2人の仲直りを手伝つてくれるつて！」

「それをどうして俺に？」

「まあ当麻も手伝つてくれないかなあなんて？」

「いや別に嫌つて訳じやないですけど……あ、薰さん何か言つてしましました？」

「何ごまかそうつて……まあ頼もうと思つたんだけどねあの様子じやあねえ」ももこが指さした先には

「つたくももこももこで本当にバツドタイミングな奴だな」薰と
「まあ災難だつたね薰さん、あと1段で完成だつたのに」直樹が

そうぶつぶつ言いながらトランプタワーを作っていた。

「何か介入したら怒られそうだろ?」

「そうですね」

「あつ」またパタパタとトランプタワーがくずれた。

「ももこ」薰の呼びかけにももこはビクッと体が震えた。
「か、薰さん？」

「俺もその仲直りとやらに協力させてもらおう。」

「え?」トランプを片付けながら薰が放った言葉にももこは困惑する。
「まあタダとは言わないけど、こういう時は交渉していいんだぜ?」薰
はチラリとみたまど直樹の方を見る。

「あら私?」「なんでボクの方も?」

「んな事言つたつて調整屋の要求は生々しいんだよ、まだ情報屋の方
がましだ」

「まあ周りにいる使い魔を倒してくれかコーラを数本買つてきてく
れつて言われれば無論後者を取るよね、ま、ボクはあんまり専門外の
事をしたくないのが本音だけね。」

「さて、いろはは何か頼まないのか?」薰が改めていろはに問う。

「え、そんな私は・・・」いろはは謙遜するが

「じゃ、いろはちゃんへの報酬は妹ちゃん捜索のお手伝いかな、」

「いいんですか?」

「ああ、何か困つたことがあつたらいつでも呼んで」

「ありがとうございます!」

「じゃ俺はカフェオレ1杯で手を打とう?どうだい?」薰は交渉を持
ち掛けれる。

「うーん何か裏がありそただけどなあでもそれで済むんだつたら手
伝つてもらうかあ

「じゃ決まりだ」

「あ、俺は全然大丈夫です、報酬とかそんな・・・」愛想笑いを浮かべ
る当麻に

薰が「いや何か頼んだ方がいいぞ。例えば・・・」と薰がささやく

ち

「あ！水波さんの連絡先！」当麻が急に思い出し叫んだ

「大胆だなあ・まあいいけど・・・」少し驚いたももこはやれやれと仕草をしながら言った。

「うーんももこさんの作戦つて上手くいくんですか？」

「どうだろうね。」

作戦決行の日、ももこが提示した作戦はあまりにも強引なものだった。

ももこが委員会帰りのかえでを、いろはと薫と当麻が3人がかりで委員会終わりのレナをそれぞれ確保し待ち合わせ場所に誘導するというものだった。

「あまりにもこう強引と言うかお粗末というか荒っぽすぎるというか」

「まあももこの作戦だ、本人があの自信だ。よっぽど勝算があるんだろう？」

「そもそもももこさんが言う”エサ”で水波さんが釣れるんですか？」

ももこが言う”エサ”とは史乃沙優希という彼女が推しているアイドルの野外ライブがあると騙ればホイホイついていく、というものだつたが、

「まあ彼女は警戒心が人一倍強いからな、」

「つてかみたませんも言つてましたけど、好きなものでだましたら絶対怒りますよね？」

「まあオタクは敵に回さない方がいい、古事記にもそう書いてあるし、」

「たぶん古事記には書いてないですけどそうですよねえ」

しかし不安がある、という薫の提案でそのエサで釣るのはいろはの役割、何かあつた場合は当麻と薫でサポートするという事になつた。が、

「うーん委員会ならこんなに遅くなるはずはないんですけどが、

「まあこんな日もあるさ」

「まさか作戦がバレたとか・・・」

「んな訳ない……いやももこの事だ」

一向にレナが現れない。

すると突然、待機しているはずのいろはとで隠れている2人のもとへ駆け寄る、どうやら一大事だという表情をしていた。

「レナちゃん今日は委員会なかつたみたいですよ!!」 そういういろはは言った。

しかし薫は冷静に

「で、彼女はいづこへ？」

「ゲームセンターらしいです！」

「よし、ここからも遠くないはずだから急ぐぞ。」

薫たちは急いでゲーセンに向かつた。

「いろは、ももこの奴、テレパシーか？」

「はい、そうです！」 ゲーセンに向かう途中の薫の問いかけにいろはが答えるが

「テレパシー？」 当麻が困惑する。

「ああ、言い忘れてたけど魔法少女同士はテレパシーで繋がつてるとから。」

「それ早くいつてくださいよ!!」 当麻はしつと出てきた情報にツッコみ、そしてこう嘆いた。

「ももこさんもなんて行き当たりばつたりなんだ!!」

ゲームセンターにたどり着くと当麻が口を開いた。
「案外近くてよかつたですね・・・」

「さてとレナを探すんだろ。」 しかしやはり薫は冷静に言う。

「そう、でしたよね！」 いろはが返す。

ゲームセンタにたどり着いた3人はレナを捜索を始めると

「あ、あれって・・・」 いろはが人影に気づき、指さした方向には「この台判定おかしくない!?」 とダンスゲームをしていたレナが愚痴をこぼしていた。

「意外に早く見つかったか、じゃあ作戦決行だ。」

「なんか怒つてますけど・・・」

「でも今行かないと逃しちゃうんじゃ」いろはの心配に当麻が返す。「ふう……よし！ 行ってきます！」いろはが深呼吸し、レナの元へ向かつた。

「じゃ、俺たちはあの筐体の影にでもかくれるか」

「あの、薫さん、どうして作戦に協力したんですか？」物陰に隠れたまま当麻が薫に問いかける。

「……」しかし薫は沈黙していろはとレナの方向を見つめたままだ。「もしかして絶交ルールの正体を確かめるつもりですか？」

「……」相変わらず薫は無反応だ。

「当麻、マズいぞ。」急に薫が口を開いた。

「もしかして作戦が失敗したんですか？」

「そのまさかだ、ほら」そう言う薫の視線の先には案の定好きなもので釣つてきたいろはに怒った様子のレナが
「そこにも誰かいるんでしょ？」と薫たちの隠れている方向を指さした。

「ももこだと思つた？ 残念！ 柴田薫でしたー」「ふざけてる場合ですか」薫と当麻が物陰から現れた。

「なんで薫さんと真山までももこに協力してるのよーとにかくレナ、絶対に行かないからね！」

「これに関してはももこを止めなかつた俺が悪かつた。代わりに謝罪しよう。」

「アンタの謝罪は要らないわよ！」

「まあまあ水波さん」ペコリと頭を下げる薫に怒りが収まらないレナを当麻が落ち着かせようとしていると、

「レナちゃん！」とレナを呼ぶ声がした。

「え？ かえでちゃん……？」

現れたのはかえでだつた。

「ええ！ 秋風さんはももこさんが連れてくる手筈じや！」

「どうやら考える事は一緒だつたなで、やつぱり目的は仲直りかい？」かえでに薫が問う。

「だつてレナちゃんが謝つてくれないので……理由を聞こうと思つて

「もどこかに逃げちやいますし」

「あのねえ、かえで、レナは絶交したの。謝る理由なんてないわよ」かえでの説明に強い口調でレナは言う。

「あの、水波さんつてまさか絶交ルールの事……」

「え、ま、真山！そんな訳ないでしょ！」

誰もが図星じやんと思うリアクションを取るレナはさらに続ける。
「そもそも、あ、あんな訳の分かんない話をレナが信じると思う!?」
「でもレナちゃん、いかにもつて反応してたよ」かえでが指摘する。それも申し訳なさそうな表情で。

「とにかく！そんなバケモノにさらわれるなんて話、全然信じてないないからね！それにかえでは絶交してるんだから……その……もう来ないで！謝罪も何もいらないから!!」

「あ、ちょっと待つてよ!!」

そんなかえでの声には目もくれず、レナはその場を全速力で逃げ出した。

「水波さん待つて!!」当麻も全速力で追いかける。

「薰さん、どうするんですか!?」

「俺たちも後を追うぞ」慌てた様子のいろはに薰は答えた。

レナを追い市街地に出た当麻に電話がかかってきた。

「こんな時に、あの、もしもし？」

「当麻！今どこにいる？」

「薰さん!? いま水波さんを追いかけてるところなんで分かりませんがでもそんな遠くまでは行つてないはずです！つてか薰さんはどこにいるんですか!?」

「詳しい説明はあとだ！今からいうポイントまでレナを誘導しろ！撲み撃ちにするぞ！」

「そのポイントってのは？」

「ここ近隣のNOWSONの場所は分かるか？」

「どこのですか？」

「ここ近隣で隣にカフェがあるNOWSONだ！とにかくそこの角の

路地まで逃げ込むように誘導してくれ！」

「は、はい！」

薫に言われるがままに当麻はレナを誘導した

「ちょっと！ 真山の奴どこまで追うつもり!?」 そのガツツと足の速さに改めてレナは驚くが、それでもレナは止まろうとしない。

そして、

「こなら、真山の奴をいつたんやり過ごせるかもしれない」とレナは角の路地に隠れてやり過ごそうとしたが

「おつとそは問屋が卸さないぜ」

奥の角から薫といろはとかえでが姿を現す。

しまつた、とレナは引き返そうとするがそこには追いついた当麻が現れる。

「すゞい、本当にレナちゃんが来た・・・」 いろはは驚く

「ど、どうしてここが分かつたのよ！」

「こ近隣で路地に隠れるなり撒くなりするならここしかないだろ? レナ、まさか簡単にこつちのトラップに引っかかるとは」 まるで犯人が吐くありきたりすぎるようなレナの質問に薫は答えた。

「さつきからなんでみんなして追いかけてくるのよ。だつて、もうレナ達は」

「水波さん、それは違うよ。本当は秋野さんと仲直りしたいんでしょ？」 そうどこかもの悲しげな顔で言いかけたレナに当麻が言つた。

「そもそもアンタもなんで協力してるのよ、真山、薫さんに言われたの？」

「それもうすぐですが、ももこさんやさつきの秋野さんが可哀想だったからです。」

うんうんと横にいたいろはもうなずく。

「俺もぶつちやけ絶交ルールの事が気になりますけど、それ以上に可哀想な気がして。」 どつちにしろ放つておけなかつたんです、と言いかけたその時、

「真山さん、もういいです。レナちゃん、謝らせて!!」

しごれを切らしたのか、かえでがレナに向かつて強く言い放つた。

「やめて、」レナが急に慌てだした。

「ううん、謝らせて！」かえでが強く声を上げる。

「やめろって言つてるでしょ!!」レナも声を上げる。

「薰さん、やつぱ止めた方が」「いや、このまま見ておこう。」

「ごめんなさい！レナちゃん！」

「あ、謝つた……」「言つたねえ」

「別にこれまでの事は謝つて欲しいわけじゃないからその……また、一緒に戦つて！」

「ちよつ、この、バカ！もしさらわれたらどうするのよ!!」

「やつぱり水波さんつて」

「絶交ルールのこと信じてたのか……」

「やつぱりね。それでかえでやももこの奴を避けてたのか」
かえでの全身全靈の謝罪と焦るレナをみた薰たち3人が口々に言つた。

「……信じて悪い!?」

「悪くないさ、基本この国は自由信仰だからね」薰が返す。

「そう言う事じやなくて！レナが絶交なんて言つたせいにかえでがさらわれたら……」

「でもその割には何も起きてないですよ」

「やつぱりももこちゃんが言うようにどうせ噂なんだよ」レナの心配に当麻とかえでが言うが……

「な、なに!!」「ま、魔女!!」

急に周りの光景が変わった。

しかしそれは魔女の結界と霧囲気が違つた。

「いや、魔女の結界とは霧囲気が違う！」薰がいそいそとカバンから拳銃を出す。

「じゃあアレつて……」当麻が指さしたのは

――『』『』『』!!

人語を介さないそれは錠前のようなバケモノだつた。

「……知らん！とにかく気を付けろ！」

「し、知らんつて！そんな！」

—『』『』『』『』『』!!—

「キヤツ！」バケモノはかえでを拘束した！

「まさか本当に秋野さんをさらいに!?」当麻は叫ぶ

「そのまさかです！かえでちゃんを守らないと！」拳銃を構えた薫と変身したいろはとレナは臨戦態勢に入るが

「ダメだこで撃つたらかえでに当たる！」そう言つて薫はチツと舌打ちをする

「かえでを離せえッ!!」そしてレナはトライデントのような槍で錠前のバケモノを攻撃しようとしたが

「な!?」

そのバケモノは結界ごと姿を消してしまった。

「逃げられた……」「き、消えた……」当麻とレナはあっけにとられていた。

「本当にさらわれたんですか……」

「そう考えるのが妥当だろう。」いろはのつぶやきに薫が答え、

その場に一瞬の静寂が走つた。

to be continued . . .